
仮面ライダーディカイザー ~世界の支配者~

DEADPOOL ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディカイザー〜世界の支配者〜

【Nコード】

N7477U

【作者名】

DEADPOOL ZERO

【あらすじ】

元世界の支配者、ディカイザー。九つの世界を巡り、彼の新たな支配は何を起す？

支配をあきらめた元帝王は、崩壊しかけた世界の少女と新たなる世界を巡っていく。その先に何があるかは世界の意志にも分からない。

・・・

その男、元帝王（前書き）

気持ちを切り替えて、新しく執筆するのであえて連載します。わが
ままをお許しください。

その男、元帝王

ここには世界が無数に存在する。

人々の笑顔のために戦う古代の力を持つ戦士の世界、皆の居場所を守るために戦う黄金の戦士の世界、戦いを止めるために戦う龍の戦士の世界、戦いという罪を背負いながら誰かの夢を守るために戦う赤い光を放つ戦士の世界、愛した人々のために自分を犠牲にしてまで戦い続ける青いスピードの戦士の世界、古き怪物を音撃によって清める鬼の戦士の世界、人々に擬態する怪物を音速を超えるスピードで倒す天の道を行き全てを司る男と豪語する赤いカブトムシの戦士の世界、不幸で気弱でも仲間とのつながりや全ての時間を守るために戦う電車の戦士の世界、人の命を吸う種族の女王と人間の音楽家のハーフでありながらその種族と戦い続け人々の心の音楽を守るコウモリのような戦士の世界、その世界の戦士達の力を持ち破壊者でありながらその戦士達と絆を作り新たな力を生み出しながら旅して戦う戦士の世界、風の吹く街に蔓延る人を怪物に変える悪魔の装置を壊し変えられた人々を助ける二人で一人の戦士の世界、無欲でありながら欲望から生まれる怪物を欲望から生まれし力で戦う三色の戦士の世界。

そう、世界は一つだけじゃない、それぞれの世界にその世界の主役がいるのだ。その内の一つの世界に新たなライダーが生まれようとしていた。

く?????

たくさんのライダーが一人のライダーを倒すためにそこにいた。空中から攻めるライダー達、地上からマシンに乗ったり走ったりしながら攻めようとするライダー達、水中からもライダー達が攻めてくる。

それはただ一人のライダーを倒すため、しかしそのライダーがいる

と思われる方向から眩しい黄金のレーザーが地面を薙ぎ払う。それと同時に地面から火柱が飛び出し、何人ものライダーを吹き飛ばす。

「ぐわああああああ！」

「ぎゃああああああ！」

『ファイナルベント！』

『エクシードチャージ！』

爆発の中から緑色の牛のようなライダーと白いラインが走るライダーがそれぞれの必殺技を放つが、その目標であるライダーは黄金の光の壁によって攻撃を防ぎ一瞬で近寄ると黄金の光を纏った剣で斬り裂き爆発させる。

さらにそれに続くように多数のライダーが必殺技を発動していく。

『『『ファイナルベント！』』』

『『『エクシードチャージ！』』』

『スピニングダンス！』

「音撃射！疾風一閃！」

『エターナル！マキシマムドライブ！』

『セルバースト！』

炎や光を足に纏いキックを放ち、重火器を撃ちまくり、剣から強力

ライダー達が謎のライダーと戦う夢を懐かしそうに思い出していると目の前の扉が大きく吹き飛ばされる。当たり前そうだった彼は、人間とは思えない程高く飛び回避する。そして何故か無傷だった椅子の上に立つ。

「まったく。何だよ？俺はもう世界の帝王なんてやめたのによ。」

と言う彼の目の前にいるのは闇のディケイドであるダークディケイド（Dディケイド）、その後ろに仮面ライダーの一人である電王の世界の仮面ライダー、幽汽スカルフォーム（幽汽S）とハイジャックフォーム（幽汽H）が人形のように立っていた。

「悪いな。いい加減、お前のその帝王の名を持つライダーの力が欲しくてな。今日でお前も潮時さ！」

Dディケイドが指を指すと、ダブル幽汽が勢いよく走りだし帝の上から専用武器の剣とザウエシガツシャーを振り下ろす。

しかしそれをいくらかかわすと攻撃を受け止める。そして手から放った光と共にその二人をカードにする。

「残念。俺のカードは俺にしか使えないからな、でもお前は特別さ・・・久しぶりに帝王の世界への凱旋だ！」

そして帝は仮面ライダーの一人、ディケイドのベルトであるディケイドドライバ―を黄金にし真ん中が青色の感じのベルト「ディカイザドライバ―」を腰に巻く。そしてサイドバックルを引き、左腰のディケイドの武器であるライドブツカーに酷似した物から一枚のカードを取り出し叫んだ。

「変身！」

『カメンライド！デイカイザー！』

カードを装填しバツクルを押すと同時に12体の虚像が現れ、どんどん帝と重なり最後の1つが重なる。ドライバーから白銀のライドプレートが9枚顔に刺さり全身に色を付ける。

その姿はデイケイドに酷似しているが、マゼンダの部分と白い部分は黄金に輝き、黒い部分は白銀に染まっていた。さらにデイケイドの物が二つ左右非対称で合体したような青い胸の装飾と同じ色の複眼があるマスクにあるライドプレートはとても鋭く1、3、5、7、9枚目が長い。

「ついに、ついに現れたか！世界の帝王……デイカイザー！」

「だから、俺はもう帝王はやめたの。てか、世界を支配するなんて間違いだったんだよ。」

デイカイザー、それがこの黄金のライダーの名前である。しかし当の本人は戦おうとはしない。さらに帝王の部分も否定している。

「ならば、何故渡さない！」

「悪の組織に渡すより、自分で守った方がいいだろ？」

「ならば力尽くだ！」

Dデイケイドがライドブツカーを構えながら向かってくるのに対し余裕に構えるデイカイザー。まずはDデイケイドが一撃を放つ。

「おっと。まだまだだな？」

『カメンライド！オーガ！』

Dデイケイドは1枚のカードを装填し、発動と同時に黄金のラインが現れファイズの世界のライダーの一人であるオーガとなった。

『ファイナルアタックライド！オ、オ、オ、オーガ！』

ダークデイケイドオーガ
DDOは黄色い縁のカードも発動し巨大な黄金の刃を振り下ろし、城の壁ごとデイカイザーを斬り裂いた。

「や、やった！勝った！しとめた！」

と元のDデイケイドへ戻り後ろを振り向いたその時だった。

『ファイナルアタックライド！デイ、デイ、デイ、デイカイザー！』

後ろから光のカードが20枚現れ、その中を高速でデイカイザーが通り抜けてくる。

「あの程度で倒せると思うなよ！これでも元世界の帝王なんだぜ！」

「し、しまった！ぐ、ぐわあああああああ！！」

すっかり油断していたDデイケイドは何も出来ず、そのままディカイザーの必殺技「デイメンションダイナミック」を食らい爆発、消滅した。それと同時に城が崩れたそうとしていた。

「戦い過ぎたか？でも、どうしようかな？この城結構気に入っていたのに。」

思い出深い城から中々出ようとしなかったデイカイザーだったが、崩壊が大きくなり瓦礫などが落ちてくるとあきらめたかのようにテラスから外へ飛び出す。そして彼が着地するのと同時に城は完全に崩れ落ちた。

「……どうやら一難去ってまた一難か。」

と言いながらある方向を見ると、歴代平成ライダーが戦った敵がずらっと並んでいた。

「……元帝王の出現の祝いにはちよっと多すぎるぜ！」

『アタックライド！フレイムブラスト！』

一枚のカードを発動し、キングライドブッカーガンモードとクイーンドライバーから炎を纏った光弾を放つ。それは何体かの敵に触れただけで大爆発を起こし、周りの敵も巻き込み消滅する。それでも全然減っていない。

「超疲れてるけどしょうがねえ。一気にまとめてパーティーに誘ってやるよ！」

その様子を見ながら、二つの武器を剣に変えデイカイザーはその敵達の中へ突っ込んだ。それと同時に襲ってくる敵達、攻撃をかわしながら縦に横に斜めに時にはまとめて斬っていくデイカイザー。遠距離からの攻撃には、弾き返したりガンモードで反撃したりと正に一人VS多人数の大乱戦がずっと続いた……

（数時間後）

「おらあああああああ！」

あんなにたくさんいた敵をほとんど倒し、疲労困憊な状態で最後に残った緑色の牛のような敵を最後の力を振り絞り何発も放った光弾で爆散させたデイカイザーはその場に力なく倒れる。

（やべえよ、もう動けねえ。例えこの俺でもさすがにあれはきつかったな……）

変身が解け、敵達の内部まで響いた攻撃で傷だらけの帝は休息のため眠ろうとしていた。しかし彼の目の前に何者かが現れる。

「まだ眠るには早過ぎるよ、天海地帝君。」

どこかの民族衣装のような服が特徴の彼を見て、帝は驚く。

「仮面ライダーオーズ、火野……映司。」

そう彼は仮面ライダーオーズに変身する火野映司その人だった。

「悪いけど、その力を使ってやって欲しい事があるんだ。」

「残念だけど、あんたは自分で味わったはずだぜ？俺の世界への干渉能力の強大さをさ。」

「確かにあの時はすごかったよ。本当に世界を支配して意のままに操るその力、でも今はそれを言い争ってる場合じゃないんだ。」

「また世界の崩壊とか、大ショックとかの復活かい？そんなのデ

イケイド達がいりゃ大丈夫だろ？」

と言っただけでまた眠ろうとする帝に少し困惑しながら映司は告げた。

「そのイケイドの力では到底干渉出来ない、君と同じくらいに強大なライダーの世界が大シヨッカー以上の組織に狙われていたら？」

それを聞いた瞬間、起き上がる帝。だるそうにしながらもしっかりと聞く態勢になる。

「そっぴゃあ、あの夢に知らないライダーが出たのはそのためか。理解したぜ、火野映司。元世界の帝王に任せな。」

「ありがとう。それじゃまず、君はこの名もない世界に一番近い世界を救い、その後ライダー達の世界を巡ってその世界を正義の支配で悪の支配を倒す。それだけさ。」

「いいけど、その近い世界を救えばどうなるのさ？」

「新しい明日を生きる力が手に入ると思っていてくれればいいよ。それじゃ家やマシンはその世界に先に送っておく。頼んだよ！」

「えっ！いきな……」

説明を聞き終えた直後、灰色のオーロラによって世界を移動させられた帝であった。こうして元世界の帝王の平和な世界にするための支配の旅が始まった。

その男、元帝王（後書き）

この作品で今度こそ連載作品は最後です（リメイクしようとしていた作品は別）。

とある世界での出来事（前書き）

こんなに長く書いたのは初めてだ！

とある世界での出来事

自分の世界へやってきた悪の力を倒した後現れた仮面ライダーオーズこと火野映司に頼まれ、見たことも無い自分と同等もしくはそれ以上の力を持つライダーの世界を、今まで以上に強力な悪の力から救うために正義の力による支配を行う事になった「元世界の帝王」と名乗る天海地帝こと仮面ライダーディカイザーは今、もっとも近い世界にいきなり飛ばされていた。

突如として、今いるこの世界で新たな明日への道が見つかると言われ、いきなり飛ばされた事への怒りを何とか抑えた帝は周りを見渡した。

「なんていうか、超平和なんですけど。」

自分がいた世界に比べ、建物が多く、人々もたくさんいるこの世界に本当に自分に役立つ物があるのかと一瞬疑った帝だが映司がこの世界に家とマシンを送っておくと聞いていたのを思い出し、少しめんどくさがりながらも探しにいく帝であった。

「世界を支配する帝王、ディカイザー。その力で何を支配する？」
数十分をかけて、自分の苗字が書かれた掛札がある家を見つけた帝はすぐさま近くにあったマシンらしき物にかかっていた大きな目の布を取る。

「帰ってきたか、マシンディカイザー！」

ディケイドの専用マシン「マシンディケイダー」のマゼンタの部分を金に染め、黒い部分を白銀に換えた感じのマシンがディカイザー

の専用マシン「マシンデイクイザー」である（ライトと白い部分は青）。

「あの時、天道と加賀美のダブルハイパーキックで一瞬の間を突かれて破壊され、どこかに飛ばされてたと思ったけど直されていたんだな。」

と懐かしさを感じながら呟く。ちなみに天道は仮面ライダーカブト、加賀美は仮面ライダーガタックに変身する者である。

次に行ったのは家の中の確認である。一応生活に必要な物は全てそろっており、それに安心すると近くにあったあの城にある椅子と似た椅子に座り唯一の趣味である昼寝をするのであった。

一方その頃、どこかの学園から沢山の生徒が下校しているがその中で一際目立つ生徒がいた。太陽の光を反射して輝く、透き通るような水色の髪と瞳。きれいに整っているプロポーションを持つ彼女の名前は月海冬花^{つきみふゆか}。この学園に通う高校2年生でいつもなら友達と帰るのだが、今日はその友達が部活でまだ帰れないため一人で帰っていた。

「今日も平和でいいな〜しかも、今日は雲がない快晴。いつも以上に月がきれいに見えるな〜」

ちなみに彼女の趣味は月を眺めること。理由は見ていると心が落ち着くからである。しかし、その平和な時間は長く続かなかつた。世界の崩壊という現象によって。

「な、なんだあれは!」

「ビルが消えていつてるぞ!」

「えっ？」

突然の叫び声が聞こえ、冬花がその方向を見ると謎のオーロラがビルの上に現れ通過するとその後にはビルが存在していなかった。そのオーロラは、デイケイドを敵視する世界の監視者鳴滝が使う灰色のオーロラとは違い、必要以上に輝く禍々しい虹色であった。

「な、何なの？あれ……」

冬花がその光景に驚き、動けずにいると今度は別の方向からオーロラが現れその中からさらに驚きの光景を目にする。

「ギ、ギギギギギギギ！」

「ガアアアアアアア！」

「シュー！シュー！」

蟻を模した黒い異形の集団はアギトの世界の「アンノウン」、カブト虫のような灰色の怪物はファイズの世界の「オルフェノク」。そして蛾のような感じの緑色の怪人は剣の世界の「アンデット」だった。

「な、何なの？」

「ぎゃあああああああ！」

「うわあああああ！」

「に、逃げるおおお！」

「……！う、嘘でしょ？こんなの……こんなの酷すぎるよ……」

あまりにも不思議な現象に身動き一つすら出来ない冬花がさらに聞こえた悲鳴のした方向を見ると、さらにオーロラが出現し、その中から現れた多数の見たことも無い存在が近くの人々をそれぞれの手段で殺し始めたのだ。

鋭い爪や己の武器で斬り裂き、銃や針などで撃ち貫き、牙で肉や骨を食いちぎる。普通の人間ならば見たただけで、失神するか嘔吐したりするだろう。

しかし、冬花は失神や嘔吐をするどころか普通にそれを見続けていた。

「どうして？こんなにも酷くて、気持ち悪いのに私はこんなにも平気にいるの？」

自分の状況に対応出来ず、座り込んでしまった冬花。そしてその近くに鮫のようで全身をステンドグラスのような感じで光らせる、キバの世界の怪人「ファンガイア」が迫っていた。

そしてそのファンガイアが冬花へ向けて生命エネルギーを奪う吸命牙を出現させたその時である。再び虹色のオーロラが出現し今度は冬花だけを通り過ぎる。すると彼女に変化が起きる。

「何だろう？身体の底から力が……みなぎってくる。」

その言葉と共にユラリと立ち上がる。だがしかし、冬花からは彼女の物とは思えない謎のオーラがあふれ出していた。それに髪の色も白銀へと変わり、目付きも鋭くなっている。

「そつかあ…考えてみれば、私のこの平和な日常が壊れたのはあなた達のせいだよね…責任、取ってよ!」

叫ぶと同時に右手にオーラが集まり、一本の刀を形成する。そして刀を鞘から抜き、目にも止まらぬ速さでファンガイアを切り裂く。

「グギヤアアア!」

人間業とは思えぬ鋭い一閃を浴びせ、ファンガイアはステンドグラスが割れるように爆散した。

「ハア…ハア…い、今の私がやったの?」

刀を鞘に戻すと元の冬花に戻るが、今起きた出来事に驚いていた。すると何処からか声が響く。

(ソナタハアレニ…テキゴウシタノダ…)

「え?何なの?頭の中に、声が…?」

(ソナタハエラバレタ…ダカラコソヤラネバナライコトガアル…)

まだ少し状況を飲み込めていない冬花であったが、やるべき事は何なのか頭に響く声へ聞いてみる。

「な、何を?」

(ワタシヲツカエ…ソシテ…セカイヲシハイスルテイオウヲキルノダ…!)

会話しき物を終えると再び刀を抜いた時と同じ状態になる。その様子からしてどうやら刀に操られてしまったようだ。

「そうなんだ。私の世界が壊れたのは、たぶんその帝王って奴のせいなんだ。……だったら絶対に許さない。私の平和を奪った責任を取ってもらわなきゃ……」

そして狂喜の笑みを浮かべると、世界の崩壊や怪人達によって壊れた建物や殺されてしまつて面影が殆ど無い人間を見つめた後、目の前に見えた怪人達や生き残つた人達へ向かつて刀を抜きながら走り出すのであつた。一筋だけ涙を流して……

謎のオーロラが出現した時と同じ頃、帝は世界の雰囲気が変わつた感じがしたためにマシンディカイザーで街中を走つていた。

「一体どういう事だ？昔見た、あのオーロラはまた現れるし、怪人の気配もいっぱいするし、どうなつてんだ？」

そして急に広くなつた場所へ出ると、そこには人間が死んだ跡もあるが何故か真つ二つにされた怪人の死体もあつた。

「こいつはひでえ。まるで見境無くぶつた斬つたような感じだ……ん？何だあれ？」

帝が見た先には1本の刀が刺さつていた。帝は危ないと警戒しながら近づいたその時だつた。

「見つけた。」

「何っ！」

突如、地中から冬花が飛び出し刀を取って斬り付ける。それを何とかかわし、ドライバーを取り出すがその姿を見て帝は驚いた。

「お、女の子！？ちょっと待てよ！何で俺を斬ろうとするのさ!？」

「最初は世界を歪めたあなたを殺そうとしてたけど、もうどうだっていいわ。今はただ、人でも怪人でも何でもいいからブツた斬りたいのよ！」

その言葉と共に再び刀を抜き斬り掛かる冬花。帝は変身する訳にはいかないため、攻撃をかわすしかなかった。

(くそ！怪人ならともかく、こんな女の子じゃ変身も出来ない。だからといって止めない訳にもいかない。一体、どうすればいいんだ!?)

と考えながら、物陰に隠れたその時肩に激痛が走る。良く見ると大きな斬り傷が付いていた。

「ぐわっ！ま、まさか…！」

「そう、そのまさかよ。この刀は物体を通り抜けて斬ることが出来るのよ。」

いつの間にか近くにあった冬花にさらに斬られる帝。いくらか食らっ
てしまっが、一瞬の隙を突いて刀を蹴り飛ばす。

(シマッタ……コントロールガキレテシマッタ……)

「きゃっ！」

「おっと、危ない。」

その衝撃で倒れそうになった冬花を抱きかかえるようにキャッチする帝。よく見ると、目つきや髪の色が元の冬花に戻っていた。

「あ、あれ？私は何してたんだろ？」

「たぶん、君はあの刀に操られていたと思うよ。」

状況が分かっているような冬花に今までの事を説明する帝。それを聞いた冬花は信じられない表情で帝を見つめていた。

「そんな・・・私がそんな事を・・・」

「残念だけどこれは現実さ。そして君が浴びたオーロラはたぶん「支配と覚醒の虹」だと思う。」

「支配と覚醒の虹？」

「ああ。かつて、俺がとある理由で世界を旅していた時にも現れていた。そのオーロラは通常なら、ビルとかの無機物の存在を消滅させ、人とかの生物をさつき君を襲ったりした怪人に変化させるという形で支配する。」

「ただ、時々君のように何らかの力を得て仮面ライダーと同等の力とかを得た者達は覚醒したと呼ばれている。」

と出来るだけわかりやすく説明する帝に対し、冬花は一つの疑問を

浮かべる。

「あの、仮面ライダーって何ですか？」

「ああ、それはね……」

そして立ち上がるとクイーンドライバーをある方向へ発射する。その方向には先程倒されていた怪人と一人の青年が無表情で立っていた。

「……この力さえあればこんな世界、直ぐ壊せる。変身。」

その青年は腰に黒いベルトを出現させると、怪しい光と共に装甲のような物に包まれ、月のキングストーンを持つ仮面ライダーBLACKの最大のライバルである「シャドームーン」へと変わった。

「ああいう、悪い奴らをぶっ倒す正義の味方……かな？」

そして帝はデイカイザードライバーを装着すると、1枚のカードを取り出す。

「もしかして、あなたは……」

「そうさ。でもまあ、見てなよ。元世界の帝王の戦いぶりって奴をさ。変身！」

『カメンライド！デイカイザー！』

住んでいた世界での戦いの時と同じように変身した帝は、12体の虚像に包まれその姿を黄金に輝く次元戦士デイカイザーへと変える。

(ドウヤラ・・・アイツガセカイヲシハイスルテイオウノヨウダ・・・)

「えっ！いつの間に私、刀なんて拾ったの？」

冬花がその姿に驚いているとまた頭に声が響いたため、右手を見ると先程の刀を既に握っていた。

(ソレヨリモ・・・ハクヤツヲキレ・・・デナイトコノセカイガタイヘンナメニアウゾ・・・)

「で、でもそんな悪い人には見えないよ？きつとそう言われるのは訳があるのよ・・・」

(シカタガナイナ・・・コウナレバソナタヲムリヤリアヤツツテデモヤツヲキル・・・)

「や、やめて！そ、そんな・・・なの・・・」

冬花が言い終わる頃には勝手に刀が抜けてしまったがために冬花は再び覚醒状態へとなるが、今度はそのまま動かない。

(ドウシタコトダ・・・ナゼウゴカナイ・・・)

「いや・・・私はあの人を・・・斬りたくない・・・！」

(ナンダト・・・ワタシノチカラヲウワマワルイシデウゴキヲトメテイルノカ・・・)

「私は……信じたい……あんなにたくさん、人や怪人を斬ってしまった私でもしつかりと色々教えてくれた……あの人の事を……」

そのまま彼女はディカイザーを見つめているのであった。

「さあて、感覚を取り戻すための準備運動を始めますか!」

一方怪人達と戦い始めたディカイザーは感覚を取り戻すため、色々な攻撃を始めていた。

「まずは格闘戦から。そらよ!」

近くにいた怪人達から手当たり次第に殴り、蹴り、投げ飛ばしていく。最初は荒々しかったが、段々とそれは正確かつ速く強烈な一撃となっていた。

「ギシャアアアアア!」

「グオオオオオオオ!」

その攻撃から逃れたイモリのような龍騎の世界の「ミラーモンスター」「青い鳥のような電王の世界の「イマジン」が剣や銃などを構える。

「そつちが武器ならこつちもこれで行くぜ!」

それを見たディカイザーもキングライドブッカーとクイーンドライバーを構える。ブッカーの方は最初ただ振るだけだったが、敵の攻

撃を防ぎつつ斬っていく内に動きが洗練され確実に強烈な一撃を叩き込む。

クイーンドライバーも狙いが定まらずほとんど当たらなかったが着実に1発1発が当たるようになっていき、最後には全弾命中した。

「んじゃ、本領発揮だ！」

デイクイザーの左右からやってくる大量の怪人達に対し、2枚のカードをブッカーから取り出すとベルトとクイーンドライバーへカードを入れ発動した。

『アタックライド！フレイムスラッシュ！アイスブラスト！』

電子音声と共に、ブッカーの刃は炎をクイーンドライバーの銃口は氷のようなエネルギーを纏う。さらにそのまま、近づいて来た怪人は連続で斬り倒しクイーンドライバーから冷気を纏った光弾を連続発射し怪人達を一気に全滅させた。

「さあ、残ったのはお前だけだぜ？」

「フツ、こしゃくな。俺はさっきの奴らとは違うぞ！」

シャドームーンは金の持ち手に赤い刀身の「サタンサーベル」と銀の持ち手に青い刀身の「デビルサーベル」を構えて高速でデイクイザーに迫る。

「やっと大物てつか？いいぜ、かかってきな！」

二つの武器を構え、デイクイザーも向かっていく。そして二人は何度も何度も剣をぶつけ合う。

「シャドービーム！」

「うわっ！」

一端離れると、シャドームーンが剣先から赤と青の光線を連続で放つがデイクイザーはぎりぎりです。

「確かに強いな……だったらこいつを使うぜ！」

『カメンライド！BLACK！』

デイクイザードライバーに1枚のカードを入れて発動すると、眩しい光と共にベルトはそのまま姿形は仮面ライダーBLACKと同じデイクイザーDBLACKへと変わった。

「トアッ！」

「何！？姿が変わった！……ぐわっ！」

その行動に驚いていたシャドームーンはDKBLACKの飛び蹴りを食らう。その後も2本の剣やビームで攻撃するが全部躲され反撃を食らい大きく吹き飛ばされる。

「な、何故だ！俺のこの力は最強のはずだ！」

「それはな、覚醒した力にお前自身がついて行けてないのさ。さっきの攻撃とか最初は危なかったけど今はもう、簡単に軌道が読めるぜ！」

と元に戻ったデイクイザーの説明によってシャドームーンは狂ったように走り出す。

「ち、違う！最強は俺だあああああ！シャドー、キック！」

「仕方ない。楽に終わらせてやるよ、帝王直々にな。」

『ファイナルアタックライド！デイ、デイ、デイ、デイクイザー！』

「ハアアアアアアア！」

そして二人の強烈な一撃がぶつかり、爆発を起こす。

「一体、二人はどうなったの？」

何とか元の状態まで戻った冬花が近づくとその炎の中に、先程の青年とデイクイザーが膝を地に付けて立っていた。

（帝宅）

帝の家の中でこの世界の状況を聞いていた冬花は悲しい表情だった。何故ならあのオーロラが現れたら最後、完全に世界が支配されるまでこの世界は元に戻らないと聞かされたからである。

「それじゃあ、私はどうすれば……」

「仕方ないよ。俺はこういうのをいくつも見てきたから本当の事なんだ。でもね……」

「えっ？」

「俺はその度に、その世界の事を心に覚えておくんだ……最後の瞬間まで。そして生きていく、だから君もそうしてみればいいよ。」

と帝の話を聞き終わると、冬花は決心したように立ち上がる。

「それじゃあ、私にもその旅に連れて行ってください！」

「はっ？」

「迷惑にはなりません。あの刀も協力してくれるはずだし、何より私もそんな世界を出来る限り救いたいんです！」

と深く頭を下げる。そこから数秒、突然の提案に驚いていた帝はあきらめたように呟いた。

「分かったよ。ただし、その自分で決めたことはしっかり守れよ！」

「は、はい！ありがとうございます！」

「俺は天海地帝。君は？」

「私は月海冬花です。よろしくお願いしますね。」

自己紹介を終え、二人が握手したその時だった。何と、壁に掛かっていた絵画の絵が変わりだしその中から9枚のピンぼけしたカードが出てくる。

「帝さん！これは？」

「これは新たなライダーのカード……そして、この世界のライダーは何となくだけど分かる。名前は……シャイニングキバ！」

その絵画は、ステンドグラスの破片が舞い散る中に向かい合って立つ、白銀のエンペラーキバとダークキバのようだった。

とある世界での出来事（後書き）

次回は設定です。

設定その1 (前書き)

ようやく設定が完成しました。

設定その1

〈主人公・ライダー設定〉

てんかいちみかど
天海地帝

身長178?

体重69?

辺り一面砂漠で大きな古い城にたった一人で住んでいた元世界の帝王と名乗る見た目20歳前後の青年（誕生日と本来の年齢は不明）。金色に輝くちよつと鋭い瞳にウエーブのかかった銀髪に地を意味する赤、海を意味する青、空を意味する緑のメツシユを入れた2枚目な顔をしている（メツシユの意味は帝曰くそれっぽい色だったから）。

性格は基本困っている人や世界は放っておけない尚且つ、ライダーや怪人の知識に詳しくそれを冷静に分析して戦ういわゆる良い王様な感じである。

一人称は俺で好きな人のタイプは月の光の様に淡く輝いている様な人という一見理解不可能だが、これには過去の「究極ライダー大戦」（説明は後述）が関係しているらしいが過去の帝自身の部分も含め謎となっている。

変身者を全ての世界を支配する帝王へと変える「デイカイザドライブバー」と専用武器の「キンググライドブツカー」と「クイーンンドライブバー」を所持している。これを扱えるのは次元を超えて世界中を探しても帝ただ一人らしい（帝曰く世界の意志が俺を選んだ）。

因みに何故他のライダーや変身者などに詳しく、親交が深いのは一つは大戦で何度も戦っている内に友情が芽生えたのと罪滅ぼしの旅の途中に出会って仲良くなったからである（特に一緒に旅したオリジナルの仮面ライダークウガの五代雄介や仮面ライダーオーズの火野映司とは親友と呼べる程仲が良い）。そして今、その火野映司に

よって新たなる9つの世界を救う旅へ出発させられるのであった。服装は黄金に近い黄色のシャツに白銀に近い白のコート、赤いコート、青いコート、緑のコートをかわりばんこに着ている(同じ色のスーツに近い服も所持しているが帝曰くこれは暑い所用)。好きな食べ物はポレポレのカレー、城戸真司(オリジナルの仮面ライダー龍騎)の作る餃子、甘い物。嫌いな食べ物はしそ巻き杏。趣味は絵を描く事、ローラースケートやスケボー等の滑る系のスポーツ。

仮面ライダーディカイザー

身長198?

体重90?

走力1000mを4.8秒で走る

ジャンプ力ひとつ飛び480m

パンチ力8t

キック力12t

帝曰く世界の意志と全てのライダーの力、人々のライダーを覚えている記憶が融合し作りだされた黄金に輝くディカイザドライバーで帝が変身する黄金に輝くボディと白銀のライン、青いディメンションプレートと複眼を持つ戦士。

昭和・平成・ダークを問わず全てのライダーに変身する事が可能で「世界の帝王」「世界を支配する者」

「究極の支配者」などと言われているが当の本人はもうやめていると言っている(それでも力を狙っている輩は多い)。

ドライバー自身が変身者を選ぶため、選ばれし者が変身しようとする黄金の粒子となって消滅してしまう。

ディケイド、ディエンドを超えるスペックと両者の大きな特徴を一気に所持しているため本気を出せば一つの世界をまるごと支配出来る(帝もかつてはいくらかの世界を支配していた)。

これが生まれてから灰色のオーロラ以上に危険な「支配と覚醒の虹」

(詳しい事は後述) が出現する様になった(デイクイザーでは無い何か人が為的に発動している模様)。

動力源はデイクイドのトリックスターの4倍の力があるネオトリックスター(色はロイヤルブルー)。エネルギー源はデイクイドの次元エネルギーの8倍の力がある超次元エネルギーである。

武器であるキングライドブツカーはソード、ガンモードがあり刃が刀の様になっている(長さもデイクイドの物より長い。色はデイクイザーと同じ)。デイエンドライバーを模した白銀のクイーンドライバーもソードモードに出来る(長さは普通のライドブツカーと同じ)。

通常のアタックライドの他、属性(炎や氷など)の付いたアタックライドも所持し必殺のファイナルアタックライドで20枚の3Dカードをくぐり抜けて放つ「デイメンションダイナミック」(キック)、「デイメンションジャッジメント」(斬撃)、「デイメンションバースト」(射撃)の三つを発動する。

専用マシンはマシンデイクイザー。最高時速480?で疾走し、次元を超えたりするなど帝の遠くへ行く足の変わりとなっている(帝曰く大戦の時に天道(オリジナルの仮面ライダーカブト)と加賀美(オリジナルの仮面ライダーガタック)の変身したハイパーカブト、ガタックのダブルハイパーキックによって1回破壊されたらしい。それでも耐久力はとても高いのである)。

実はデイクイザーには支配者専用のフォームとコンプリートを超えるコンプリートフォームがあるらしいが詳細は不明。

〜ヒロイン・世界用語設定〜

つぎつみふゆか
月海冬花

誕生日9月9日

年齢17歳

身長162?

体重46?

支配と覚醒の虹によって崩壊という支配を受けた世界で帝が出会った優しい雰囲気の女の子。腰まで伸びていてサラッと整えられている髪と同じ色の瞳のタレ目という美しい顔を持ち、通っていた学校のロイヤルブルーのブレザーとミニスカートの制服を着ている。

自分も虹を通った影響で、覚醒し青い鞄と銀の鍔に透き通った刀身の刀と自由自在に扱いこなせる力を手に入れる。

最初は刀に操られてしまい、怪人同然となっていたが帝に助けられ世界を廻る旅に同行する。何故か月の光を浴びると髪と瞳が透き通った青へと変わる特異体質を持つ。刀を抜くとツリ目で銀髪となる。好きな食べ物唐揚げと甘い物、嫌いな物は苦い物とまずい料理（特にまずいお菓子だとそれを作る人も嫌いになる）。趣味は月を眺める事、料理作り（特に得意なのはシチューとチャーハン）。

因みに性格は几帳面で頑張り屋、丁寧で少し天然。刀を抜くと言葉使いが荒くなり、何でも斬りたくなってしまふ（なんとか抑える事に成功した）。

せうげっか
雪月花

冬花が持っている意志のある刀。冬花を操ってその世界の人間や怪人を斬殺した後、帝を本能的に斬ろうとするがはじき飛ばされコントロールを解かれる。しかし再び操り斬ろうとするが冬花の意志がコントロールを上回りそのまま冬花の所有物になる。

刃がとても薄く目をこらさないと見えない（冬花には普通に見える）ためほとんどは斬られた事に気づかず死ぬ（刃は薄いが逆にとても固い）。

月の満ち欠けによって斬れ味が変わり、満月だと存在する物質全てを斬る事が可能（月が全く出てないと全て峰打ちにしかない）。青い三日月状の斬撃波を飛ばしたり、物質をすり抜けて斬る事も可能。さらには刀自身も成長していくため、斬れなかつた物質を斬れたり勝てない相手に勝てるようになるという。性別としては女であり、最近では冬花のアドバイザーとなる。

究極ライダー大戦

ライダー大戦にはいなかったW、アクセル、スカル、エターナル、オーズ、バースも加わり世界の支配者となっていたデイクイザーを倒すために発生した新たな大戦。

最初は互角の戦いだったが、デイクイザーが真の支配者の姿になった途端戦況は一変、デイクイド、デイエンドは消滅、全てのライダーはデイクイザーにカードの姿で支配される。しかし突如として見たことの無い9人のライダーが出現、デイクイザーと激しい戦闘の末に相打ちとなり世界とライダーは再び復活した。

帝も支配にはすっかり興味が無くなり、全てのライダーの世界を巡り謝罪し続けたおかげで彼もライダーの一人となる（なるまでの道のりは言葉では表せない程に困難と苦痛が常にあっただらしい）。

支配と覚醒の虹

灰色のオーロラ以上に大きく、禍々しい程虹色に輝くオーロラの名称で通り過ぎた物が無機物ならば消滅、生物ならば怪人化という支配を与え、まれにライダーと同等もしくはそれ以上に力を与えられるか既存のライダーに変身させられる者達がいるが纏めて覚醒したと呼ばれている。

どちらにせよ、オーロラが通った生物は殆どが自分の意志を失ってしまつたため冬花のような存在はとても珍しい。

設定その1（後書き）

次回から本編が始まります。

第1楽章「光と闇の不協和音」(前書き)

仮面ライダーディカイザー、この後すぐ！

第1楽章 光と闇の不協和音

既に悪によって支配された世界やその他の強大な力を持つライダーの世界を救うための旅に出た、元世界の帝王こと天海地帝とその悪の支配を浴びた世界の住人月海冬花が最初に訪れた世界は「シャイニングキバの世界」だった。

「なるほど。こういう感じで世界を旅しろってか、結構楽だな。」

「それじゃあさっそく、情報収集ですね！」

「その前に忠告だ。」

「忠告？」

「そう。仮面ライダーキバ系の世界には大きく分けて二つの特徴がある。まずファンガイアと人間がお互いに手を取り合ってあまり時間がたっていない世界。もう一つはすでに手を取り合って仲良くしている世界。だからその雪月花でいきなりファンガイアが居ても倒そうとしないでね。」

「分かりました。それじゃあいきましよう！」

そして二人が外に出ると、目に映る光景に驚く。普通の人間もいれば、顔にステンドグラスの模様が入った人。そして全身がステンドグラスで出来た異形「ファンガイア」が普通に並んで歩いていたり、会話をしているのだ。

「あれがファンガイアですか？」

「そう。・・・てかその格好何？」

「帝さんこそ何でタキシードなんですか？」

さらに二人の格好も変わっていた。帝は白いスーツに薄い青のシャツ、金色の蝶ネクタイでトランペットを持っている。冬花は水色のドレスと三日月の髪飾りを付けフルートを持っている。

「演奏出来るか？」

「一応出来ますけど、帝さんは？」

「やったことはないけど・・・」

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

トランペットを構えると吹き始める。その音色はとても幻想的で、初めてとは思えない程にうまかった。そして一通り吹き終わるとそれを聞いていた人達やファンガイアが拍手を送る。それに帝は一礼すると歩き出す。

「どつだ？」

「・・・恐れ入りました。」

少し落ち込んだ冬花を引き連れ、色々と探索するが逆に平和すぎて何もおかしい部分は見つからないのであった。

「一体どうすりゃいいのさ？」

「でも、平和でいいですね」

「……はあ」

あまり気にしていない冬花にため息をつくど、どこからか悲鳴が聞こえる。どうやら女性が追いかけているようだ。

「きゃああああ！誰か助けて！」

「どうした？」

それを見た二人は逃げている女性をかくまると、それを追いかけていたかのように白い装甲の戦士がやってくる。

「君達、その女性を離さない。その女性は我々、聖なる光の親衛隊が保護する。」

「ほう。すでにイクサに変身している状態か？何か裏があるんじゃないのか？」

「君には関係ない事だ！」

白い装甲の戦士、イクサは専用武器であるイクサカリバー・ガンモードから銃弾を発射するがそれを覚醒した冬花が全て弾き落とす。

「帝さん。今のうちに！」

「ありがとうございます。」

そして女性を冬花に任せるとデイクイザドライバーを装着し、キングライドブツカーからカードを取り出しサイドバックルを引いてカードを装填する。

『カメンライド!』

「変身!」

『デイクイザー!』

バックルを閉じ音声を響かせると12体の虚像が帝に重なり、ライドプレートが顔へ突き刺さると同時に色が付き姿は仮面ライダーデイクイザーへと変わっていた。

「君も仮面ライダーのようだな。おもしろい!」

「つまらないけどな、俺は。」

イクサカリバーをソードモードに変え、突っ込んでくるイクサに対し腕を組んでいるデイクイザーは暇そうにしている。

「フツ!ハツ!テヤア!」

「教えてくれないかな?あの人追いかけてる理由。」

「私に勝てたらな!」

「なら、勝たせてもらおう。」

攻撃を躲し、キングライドブツカーから1枚のカードを取り出すと

それをドライバーに素早く入れ発動する。

『カメンライド！レイ！』

氷の紋章がデイクイザーを包み、キバの世界のライダーの一人である対レジエンドルガ専用の冷気を操る戦士、仮面ライダーレイへと姿を変える。

「な、何だと！」

「その反応久しぶり。さらにこいつらもだ。」

仮面の下で少し微笑むとキングライドブッカーからDデイクイザーレイはさらに2枚のカードを取り出し、クイーンライダーへ装填し発動した。

『カメンライド！キバ！サガ！』

するとクイーンライダーからいくつもの虚像が現れ、その姿をフアンガイアの脅威から人間を守るため戦うコウモリを模した戦士仮面ライダーキバと、フアンガイアの幹部であるチェックメイトフォアのキングが変身する戦士仮面ライダーサガへと変わる。

「キバっていくぜ！」

「王の判決を言い渡す……死だ！」

「な、なんだそのキバは！？見たこともない！」

「これが本物って奴だぜ？」

召喚したライダーが一言しゃべった後3対1となったDレイはイクサをブツカーで連続で斬り裂き、それを防げば後ろからサガが専用武器であるジャコーダーを伸ばし打ち付ける。遠距離で戦おうとすればキバの格闘で邪魔される。イクサはほとんど何も出来ずに吹き飛ばされる。

「ぐっ！・・・なんて力だ！」

「それじゃ、とどめといこうか？」

召喚したライダー達が消え、Dレイはキングライドブツカーから黄色い必殺のカードを取り出し発動した。

『ファイナルアタックライド！レ、レ、レ、レイ！』

ドライバーから冷気が放出され、イクサの足を凍らせると同時に腕のカテナが外れ専用武器「ギガンディック・クロウ」が出現すると大きくジャンプしてイクサを縦に引き裂く。さらに横へ斬り裂くと全身から火花を散らし、爆発すると変身が解ける。

「ぐわあああああ！」

「さて、教えてもらおうか。あの女性を追いかける理由を。」

「その必要は無い！」

デイカイザーへ戻り、変身していた白い軍服に身を包んだ青年へ問いただそうとするとどこからか叫び声が聞こえその方向を見ると一人の白いコートのような服に身を包んだ銀髪の青年がいた。

「誰だ？お前。」

「な！貴様、光の皇帝に対して無礼なまねをするな！」

よく見ると、変身していた青年もその周りにいる人間やファンガイア達全てがひざまづいているようだった。

「正義！よく俺が来るまで持ちこたえた。あの闇側は俺が始末した、次はその金色の魔帝を倒す！」

遠くの方では気絶させられて元に戻っている冬花とファンガイアが死んだとき見せるステンドグラスの破片のような物が散乱していた。

「シャイキバ！」

「お、出番だな。いつでもいけるぜ！」

「変身！」

全身が白銀で金色の線のような装飾と青い瞳のキバットらしき生物を掴み、かみつかせると青年の顔にステンドグラスのような模様が浮かび青いベルトが出現する。そしてベルトへ装着すると彼の姿を別の物へと変えた。

一見ダークキバのようだが、全身の装甲が白銀で鋭くスーツは金色。胸の部分の翼のような鎧は青く魔皇石は虹色で複眼と背中のマントも青い戦士へと変わっていた。

「俺は白夜奏牙^{ひびくぜつが}。そして光の皇帝シャイニングキバ！貴様に聖なる光の裁きを与える！」

「なるほど、お前がシャイニングキバか。今度こそ俺が勝つたら、色々と教えてもらおうか！（魔帝じゃないけどな）」

「よかるうー！」

そして二人は人気の無いところへ移動すると同時にパンチを放つ。ほぼ互角の威力でお互いに吹き飛ばされるとデイクイザーが跳び蹴りを放つ。それを躲したシャイニングキバは両手から光弾を連続で放つ。それを様々な動きで回避するデイクイザーはキングライドブツカーのガンモードを放ち相殺する。光弾の威力は凄まじく爆発の衝撃が大きいうえに、当たった地面や鉄パイプなどが消滅していた。

「やるな。だがそれだけじゃないだろ！」

「その通りだ！」

クイーンドライバーもソードモードにして二刀流で突っ込むと、シャイニングキバもザンバットソードとガルルセイバーの二刀流で応戦する。高速の斬撃を連続で放つ二人の周りの物はその余波でどんどん斬り裂かれていった。

「まさかのアームドモンスターとザンバットソードの瞬間的な召喚に光による攻撃。結構強いな！」

「皆を守る皇帝としてこれだけの実力を身につけなければならないのは当然だ！」

「フツ、お前良い奴だな。」

「貴様も正義に対して手加減していただろ？」

「見てたんだな？」

「ああ。だが、貴様の今の攻撃などを見て分かった。お前は悪い奴ではないとな。」

お互いにゆっくりと立ち上がりながら武器を戻し、変身も解除しようとしたその時突如として赤黒い光線が放たれそこから一帯を巻き込む爆発が起きる。

「「うわあああああああ！」」

二人がその光線がやってきた方向を見るとそこにはシャイニングキバとは正反対の姿の戦士がいた。ワインレッドの装甲に黒いスーツ。緑の魔皇石が埋め込まれた黒いコウモリの翼のような鎧。小さい翼が生えた緑の複眼のマスクと黒いマントが特徴の戦士の名前をデイクイザーが告げる。

「ダークキバか……」

「絶人……貴様あああああ！」

「おい待て！」

突如怒り出したシャイニングキバがドツカハンマーを荒く振りまわして行くが、それをヒラリと躲し緑と黒のキバの紋章で動きを止めると赤黒い何かを纏った漆黒のザンバットソードを出現させる。

「ぐっ……やめる絶人。どんな事をしようとお前の愛した響は帰ってこない！」

飛ばされる。先にダークキバが立ち上がるとどこからか多数のフアンガイアが現れ、ダークキバはどこかへと消えた。

「くっ！絶人おおおお！」

「こいつらは俺に任せろ！」

『アタックライド！ビックスラッシュ！』

直ぐ様一枚のカードを取り出し発動すると、黄金の光を纏った巨大な光の刃となったキングライドブッカーから強烈な斬撃を放つ。そして大量にいたフアンガイアを数回薙ぎ払っただけで全滅させた。それが終わるとお互いに変身を解き帝は呟いた。

「話してもらおうか。今まで何が起こったのか……」

それに奏牙は黙ってうなずくしかなかった……

第1楽章 光と闇の不協和音 (後書き)

次回をお楽しみに!

第2楽章〜鍵は音の響き、そして月は覚醒する〜（前書き）

今回、冬花にさらなる変化が！

第2楽章 鍵は音の響き、そして月は覚醒する

〔白光城〕

ダークキバとの戦闘を終え帝と奏牙は、目を覚ました冬花とイクサに変身していた青年、青井正義あおいせいぎと合流し奏牙が住んでいる純白に輝く城、白光城しろひかりじょうへと来ていた。

「へえ、いい城に住んでるな。」

「そうか。さてお前達にも話さなければな、俺と絶人の関係や光と闇の戦いをな。」

王室へ案内される途中、実態化したアームドモンスターに驚いて冬花が斬りかかろうとしたのを帝が説明の補足として味方だと教えて阻止していたのはここだけの秘密である。

「さて、ここが俺の部屋だ。自由に座ってくれ。」

奏牙は専用の椅子、正義はその隣に立ち残りの二人は近くのソファに座る。そして紅茶とお菓子を用意されると奏牙は話し始める。

「改めて、俺が光の皇帝の白夜奏牙だ。俺達の目的は人間とファンガイアの共存の維持と邪悪なる闇の精鋭隊の人間やファンガイアへの襲撃を防ぐ事だ。」

「俺は元世界の帝王、天海地帝だ。よろしく。」

「私は月海冬花です。」

「俺は……」雑魚は引っ込んで。「何だと貴様！」

「ほら、短気で奏牙よりえらそうにしてるその態度。気に入らないな。」

「確かに俺も気になっていた。正義、まずは精神面だな。」

「……申し訳ありません。」

正義は落ち込みながら部屋を出て行き、それを見送った後奏牙は話を続ける。

「そういえば、お前達は見たことも無い力で戦うな。あれは何なんだ？」

「あれは別世界の力。俺達は世界を旅する者さ。」

そして帝はディカイザーの簡単な説明と冬花の世界の事情などを教えた。それに奏牙は静かに聞くことしか出来なかった。

「まさか、俺の他にもキバがいるとはな……」

「ああ、そのキバにも俺はなれるし他のキバの世界のライダーにもなれるぜ。」

と言いながらキバの世界のライダー達のカードを見せる。それを奏牙は興味深く見ていた。そのまま帝は話を続けた。

「俺の親友に言われてな、この世界と他に8つの世界が危機を迎えていると聞いて俺達はまずこのシャイニングキバの世界に来た訳だ。」

「
と言った後、支配と覚醒の虹の説明や体験した冬花の説明も追加で教える帝であった。それを全て聞き終わると今度は奏牙がしゃべりだす。」

「お前達の目的や話は、未だに信じられんが今はそれよりも絶人の事などを話しておくべきだな。」

「ああ、そうしてくれ。」

それに奏牙はうなずくと、近くの本棚から埃をかぶった古い分厚い本を出す。

「えっと、これは何ですか？」

「滅音絶人。光の皇帝である俺と対となる存在として生まれてきた闇の皇帝さ。奴は俺とまるで双子のように暮らしてきたその時の様子を納めたアルバムだ。」

帝がその埃を払いつつ、開くと確かに奏牙らしい子供と似た感じの子供が遊んでいる写真や皇帝の即位式らしき写真がたくさんあった。その時、冬花があることに気づく。

「あの皇帝さん。この私に似てるっばい人誰ですか？」

「確かにどの写真にもこの人が映ってるな。誰なんだ？」

映っている女の子は冬花の様なドレスに銀髪で碧眼の冬花に似ている感じであった。それに対して奏牙は少し悲しい表情で答えた。

「その人こそ、絶人が誰よりも愛したファンガイアと人間のハーフであった音乃響^{おとのひびき}。彼女は生まれてから何年かで親を亡くし、ちょうど見つけた絶人に連れられこの城に来た。俺とも城に住んでる皆とも仲良くなつた響は特に絶人に懐き絶人もそんな彼女を愛した。」

「だが、その響つて子に何か起きたからあいつは性格が変わつたんだろ？」

帝が言った言葉に奏牙はうなずく。

「彼女は、この世界に出現した見たことも無い怪物に襲われ抵抗する間もなく殺された。その怪物は響だけではなく、多数の人間とファンガイアの命を奪つた。しかし、奴らはダークキバとなつた絶人の圧倒的な力で倒されました。それでもあいつの悲しみは消えず、ずっと自分の部屋にこもり怪しげな実験や研究を行い続けた。そんな時にあいつは俺の目の前から自分の率いていた闇の精鋭隊を連れて姿を消した。」

「なるほど、それでお前やあいつは闇側のファンガイアを捕まえて反抗してくる方の奴は倒してた訳か……」

とさっきの行動を思い出しながら帝はしゃべる。それにうなずきながら奏牙は立ち上がり、帝の目の前まで来ると頭を下げた叫んだ。

「お願いだ、俺と一緒に絶人のしようとしてる事を暴いてくれ！あいつは今、自分の部下を使って人間やファンガイアを見境無く襲っている……これ以上奴の暴拳によって人間やファンガイアの命が失われる所は見たくないんだ！そんな事、響は望んでないと思うんだ！」

「……頭を上げるよ、光の皇帝さん。俺達はこの世界を救いに来たんだ、この世界の仮面ライダーであるお前に協力しないなんて思ってたさ。」

帝は笑顔で、奏牙の手を取る。それに反応するように奏牙も顔を上げ、自然と笑顔になると手をしっかりと握る。

「私も出来るだけ協力します！」

その手を冬花も握り、三人はお互いに絶人の目的を暴く事を誓うのであった。

〈暗黒城〉

一方、黒雲によって空を覆われたどこかの森にそびえ立つ暗黒城の王室に絶人はいた。彼の両手からは人間のライフエナジーとファンガイアの魂がエネルギー状にした何かが王室の中心に設置された石化した恐ろしい姿の蝙蝠を模した鍔の付いた両刃の剣と禍々しい形をした盾へと注がれていた。絶人はそれを狂気笑顔で見守っていた。

「もう少しだ……後もう少しで禁断の力を秘めた、全ての命を狩る剣と吸い尽くす盾が俺の物となる！待っている、奏牙。貴様とあの世界を支配する力を持つ戦士の命をいずれこの「メツバットセイバー」と「ゼツバットシールド」で奪い、必ず響を蘇らせてみせる！」

絶人の叫びと共に、赤い雷が石化した剣と盾に落ちその姿を現すのと同時に絶人はそれを合体させ後ろにたくさんいる部下のファンガイアに叫ぶ。

「良く聞け！ たった今、全てを絶滅させる禁断の力を俺は手に入れた！ 今こそ、光を闇が支配するときだあああああああ！」

『ウオオオオオオオオオ！』

ファンガイア達が叫ぶのと同時に、彼らは絶人の作った魔方阵を通り奏牙のいる白光城へと進撃して行くのであった。

「今こそ真の皇帝を決めるとき。いくぞ……キバットバット二世！」

「ああ、絶滅タイムだ。ガブリ！」

二世が噛みつくくと、絶人の顔に赤と緑のステンドグラスの様な模様が表れ鎖と共に黒いベルトが出現。それにキバットを前に突きだし装着すると奇妙な音楽と共に波紋が広がるのと同時に絶人は叫んだ。

「変……身……！」

叫びと共にさらに波紋が広がり、彼の姿を闇の皇帝ダークキバへと変える。黒いマントを翻し彼の姿と同じように赤黒い波動を纏った闇のザンバットソードをゆっくりと構え魔方阵へと消えた。

「大変です！ 邪悪なる闇の精鋭隊が大勢で攻めてきました！」

「何だと！ まさか、絶人は最初から俺狙いか！」

「そうかもな。でも俺達は仲間だ、一緒に戦うぞ！」

「分かつてる！正義、冬花と一緒に戦える者達を集める！その他の者は避難させる！」

「お任せください！冬花さん、いきましよう！」

「はい！」

二人は近くの窓から飛び出すと、逃げ遅れた人達をかばいながら戦い始める。その様子を見ながら帝と奏牙も正門から出るとすでにたくさんのファンガイアが迫ってきていた。その中にはチエックメイトフォールと呼ばれる凄まじい力を秘めたファンガイアと仮面ライダーサガがその中心で光側のファンガイアをどんどん破片へと変えていった。

「これ以上、被害は出させん！行くぞ、帝！」

「了解だ、奏牙！」

奏牙はシャイニングキバットに腕を噛ませ、帝はバツクルの装着と同時にキングライドブッカーからカードを取り出し構えると同時に叫ぶ。

「変身！」

『カメンライド！デイカイザー！』

奏牙は高貴な音と共に青白い波紋に包まれ、光の皇帝シャイニングキバへと姿を変え、帝は黄金に輝く12体の虚像に包まれ顔にライドプレートが刺さり色が付くのと同時に世界の元帝王デイカイザー

となった。

「そついえば聞きたいんだが、お前は何者なんだ？」

「平和という支配を与える通りすがりの元帝王だ。しつかり頭に覚えろよ！」

そう言いながらキングライドブツカーをソードモードにし、何体かのファンガイアを斬り裂きながらチェックメイトフォーとサガの居るところへ向かうデイクイザーを見ながらシャイニングギバはフツと笑った。

「おもしろい元帝王だな。さあ、聖なる光の制裁を味わえ！」

青白い光の波動を纏った光のザンバットソードを出現させ、また彼もファンガイア達へ斬りかかっていった。

「さあ、お前達の命を神様に返せ！」

街にいた人間などの避難を終え、その中で襲い来るファンガイア達をイクサカリバーの斬撃で斬り飛ばしていくイクサ。その隣では戦えるファンガイアと冬花が協力して戦っていた。

(ツギハミギ、ソノツギハマシヨウメン。シツカリネラツテキルン
ダ……)

「分かったよ！えいっ！やあ！」

「グワアアアア！」

雪月花の戦えば戦うほど強くなる性質のおかげで、数が減るほど冬花の斬撃と身のこなしは鮮麗されていく。そのおかげで他のファンガイア達も負けにくいぐらいに頑張って戦っていく。しかし、その場の全員へ向かって大きな三日月状の赤黒い斬撃波がいくつも飛んでくる。

「うわあああああ！」

「ダークキバ様あああああ！」

それをイクサと冬花はギリギリで躲すが、反応が遅れた光側のファンガイアと突然の事に驚いた闇側のファンガイアは躲せずそのまま斬り裂かれ悲鳴と共に破片とがす。斬撃波が飛んできた方向には闇のザンバットソードと漆黒の禍々しい形の刃と小さい黄色い魔皇石が目のように埋め込まれた真紅の蝙蝠のような鍔と黒い持ち手が特徴の全ての命を狩る禁断の力の一つ「メツバットセイバー」を構えたダークキバがいた。

「やはり雑魚では意味がないな……」

「……くっ！ 絶人様、あなたともあるう者が何故こんな事を！」

イクサは勢いよく、向かっていくがそれに対しダークキバは赤黒い光線を連発してイクサを吹き飛ばす。さらに空中を吹き飛んでいるイクサをダークキバが追い打ちするように闇のザンバットソードで斬り、吹き飛ばした。

「うわあああああ！」

「正義さん……」

地面にひびが入るほど叩き付けられたイクサに駆け寄る冬花。それを見てダークキバは少し動揺するがすぐさま冬花へ近づき斬撃を叩き付ける。

「きゃあ！」

「一瞬、響かと思ったがあいつは俺の目の前で息を引き取った。顔の微妙な部分が違う！」

連続で斬撃を叩き付けるがそれを冬花は雪月花で何とか受け流す。そして一端離れると斬撃波をぶつけ合うのであった。

その頃、デイカイザーはクイーンドライバーのソードモードも使って1枚のカードを発動した。

『アタックライド！クロススラッシュ！』

「ハアアアアア！ハア！デヤア！ウリヤア！」

「な、なんだこの力はあああああ！」

「バカなああああああ！」

強烈な二刀流の斬撃が何体ものファンガイアとチェックメイトフォアのルーク、ライオンファンガイアとビジョップのスワローテイルファンガイアを連続で斬り裂きそのまま破片へと変えた。

「続いてこれだ。」

『アタックライド！ステイングスラッシュュ！』

今度は連続で放たれる強烈な突きで後ろから襲ってきたファンガイアを貫き爆発させる。するとどこからか真珠のような物がディカイザーを襲うがそれを何とか全て斬り裂くとクイーンであるパールジェルファンガイアがジャンプしながら襲ってくる。その攻撃をかわすとパンチャキックのラッシュを躲しながらガンモードにしたキングライドブッカーとクイーンドライバールの銃撃を近距離から食らわし吹き飛ばす。

「闇の皇帝に逆らう愚か者は私が倒す！」

「残念だが俺は元でも帝王なの。しかも世界を支配していたな！」

キングライドブッカーから一枚のカードを取り出すと、それをクイーンドライバールで発動する。

『アタックライド！サンダーブラスト！』

「あんたの夜が来る・・・ってな。」

「私をパクるなああああ！」

電撃を纏った光弾を受けながら向かってくるパールジェルファンガイアを見て1枚のカードを今度はディカイザードライバールで発動した。

『フォームライド！キバ！エンペラー！』

「テンション、フォルテツシモ！」

その音声と共に左腕に小さい金の龍のような生物タツロットがくつき、黄金の蝙蝠がディカイザーを包み姿をキバの最強形態エンペラーフォームへと変わりDキバ^{ディカイザー}・エンペラーフォームとなると黄色い縁のカードを直ぐ様発動した。

『ファイナルアタックライド！キ、キ、キ、キバ！』

「エンペラームーンブレイク！」

そのままカウンターののように、赤いキバの紋章のような爪を纏った連続蹴りをパールジェルファンガイアへ放った。

「ふ、不覚！」

いくらか小さい爆発を起こしながらパールジェルファンガイア叫ぶと、結晶のように固まり爆発して破片となった。そしてシャイニングキバの方も終わりが近づいていた。

「どうした、その程度か？キングとやら。」

「くっ、何故この俺の攻撃が通じないのだ！」

そう、サガは知らぬ間にシャイニングキバの放つ光によって姿がほとんど確認出来ていなかった。

「さあ、制裁の時間だぜ！」

シャイニングキバットが叫ぶと、シャイニングキバは白の羽のマークが付いた透き通った青色のフェッスルを啜えさせそのまま吹かせる。

「ウェイク！アップ！」

それと同時に、シャイニングギバの周りにガルルセイバー、バツシヤーマグナム、ドツカハンマーが浮かぶ。さらに青く輝く白いギバの紋章がサガを捕らえしびれさせる。

「ぐおおあああああ！」

「行くぞ！」

まずはバツシヤーマグナムから白い光を纏った水弾をこれでもかというくらいに放ち、その次にガルルセイバーを持ちながら光速で斬りつけると空中からドツカハンマーで紋章ごと砕くように叩き付ける。

「がああああああ！」

「そろそろとどめだ！」

フラフラ立ち上がったサガへ光を纏ったパンチとキックのラッシュを食らわせた後ザンバットソードに纏わせた白い大きな刃で一閃し空中へ斬り上げるとそれ以上に高く飛び、後ろに宙返りし叫ぶ。

「ドカバキ・シャイニングザンバットブレイク！」

そのまま白、青、緑、紫の四色の光を纏った強烈な両足蹴りをサガに決めると、サガはそのまま白いギバの紋章と共に消滅した。そして地面に着地したところへ元の姿になったディカイザーと合流しイクサの元に向かうのであった。

その頃、冬花の方も何だか決着が付きそうだった。どちらも肩で息をしながらまた剣と刀をぶつけ合う。そんな中、ダークキバが呟いた。

「おいお前、響にそっくりなんだ・・・俺の后になれ！」

「いやです！私の相手は私で決めます！」

「ならばこのまま死ね！」

「きゃあ！」

強烈な横薙ぎで雪月花を吹き飛ばされ、さらに自身も壁に叩き付けられ元に戻る。その時には赤黒い波動を纏わせたザンバットソードを構えたダークキバがフェッスルを発動していた。

「ウェイクアツプ4！」

「滅・ザンバット斬！」

さらにその波動は大きくなり、波動を纏った闇のザンバットソードをダークキバが冬花の頭上に構えるとそのまま振り下ろす。その時冬花の周りがスローモーションのようになり、やって来たディカイザー達もそれを見て叫んだ。

「やめろおおおおおおお！」

「絶人やめるんだあああああ！」

「冬花さああああああん！」

(フユカアアアアア！)

(私、もう終わりなのかな……)

そう冬花が思ったとき、何か不思議な事が起きた。冬花にしかなかったが、自身を何か貫く感じがすると瞳の黒い部分が獣のようになるのと同時に彼女の中の何かのスイッチが発動した。

ガシッ！

「何!？」

「冬花……？」

「ザンバットの一撃を素手で？」

「一体何が……ハッ！皇帝様、デイカイザーあれを！」

イクサが指を差した冬花の背中を見ると、そこからは大きなロイヤルブルーの結晶のような翼が生えていた。それに全員が気を取られていると冬花はダークキバを蹴り飛ばす。彼女の髪も再び銀となりそこからさらに刃のような形状となると同時に青いラインが入り冬花は冷たい声で叫んだ。

「あなたを……斬る！」

叫びと共に空は夜となり、その時の月は禍々しい程に青く輝いていた。

第2楽章「鍵は音の響き、そして月は覚醒する」（後書き）

ディケイド系はすごく難しいという事を改めて実感した気がしました。

第3楽章 〽️ 思いをレクイエムに乗せて 〽️ (前書き)

今回でシャイニングギバの世界は終了です。

第3楽章 思いをレクイエムに乗せて

謎の変化を遂げた冬花は壁に突き刺さっていた雪月花を勢いよく引き抜くと、更に手の中に出現させた光の中から大きな青い剣を引きずり出しダークキバへ巨大な青い波動を十字にして放つ。

「ぐっ……ぐはあああああああ！」

ザンバットソードとメツバットセイバーで何とか防ぐが、吹き飛ばされ遠くのビルにめり込み下の地面に落ちる。それに伴い変身も解除される。

「冬花！目を覚ませええええええ！」

『アタックライド！ブラスト！』

デイカイザーは暴走している冬花を止めるために両手に持ったキングライドブツカーとクイーンドライバーから黄金の光弾を大量に連射する。しかし……

「すでに私は斬ったという結果しか残さない！」

その光弾は出た直後に全てが真つ二つにされ、消滅してしまう。それだけではなく、近くに残っていたファンガイアも含めデイカイザー、シャイニングキバ、イクサも斬られたように火花を散らしファンガイア達は全滅してしまう。

「な、何て力なんだ……光のキバの鎧でも耐えきれないなんて……」

「冬花さんには一体何が……」

そして冬花が大技を放とうとした直前、まるで糸の切れた人形のよ
うにフツと元に降り倒れてしまう。その冬花の近くに急いで近寄る、
変身を解いた奏牙、正義、帝。絶人はそれを気にすることなく、メ
ツバットセイバーにファンガイア達の魂を取り込んでいく。

「絶人お前一体何を！」

「……フツ、知りたければ明日の午前9時に思い出の教会まで
来るがいい！その時こそ、響の復活とこの世界の終わりの時だ！」

奏牙の叫びに答えながら、絶人は闇の扉の中へと消えていった……

（白光城）

「思い出の教会って何だ？」

王室のベットに気絶している冬花を寝かせながら、帝は絶人の言っ
ていた思い出の教会について奏牙に聞く。すると、奏牙は静かに呟
く。

「俺と絶人、そして響がいつも遊びに行った今はもう誰も使ってい
ない教会だ。それでも、俺達の思い出の地に変わりはない。」

「そうか。言うておくが俺も行くからな？」

「分かっている。お前と一緒にならあいつを止めれるはずだからな……

・・」

そして、正義に明日は冬花の側にいるようお願いした後、帝は外を散歩していた。しかし、唐突に振り向くと闇の中へ向かって呟く。

「出てこいよ。そろそろお前らの正体が知りたかったしな。」

そして闇の中から出てきたのは青いスーツに身を包んだ髪も瞳も青い青年だった。そして青年は不適な笑みを浮かべながら腰に謎のベルトを巻き付け叫んだ。

「変身！」

「チエンジ！アクア！」

謎の音声と共に強烈な水流に包まれ、水しぶきを起こしながら出てきたのは青年ではなく見たことも無いライダーだった。

「俺の名は仮面ライダーアクア。世界から忘れられた全てを超越するライダー達の集う究極の組織、エレメントの水を司る者！」

アクアは叫びながら、ベルトから謎の棒を取り出すとそこから青い光刃を出現させ帝へ斬りかかる。それをいくらか躲し右腕で防ぐと、そこだけを変身させてから一気に変身する。

『カメンライド！ダイカイザー！』

ダイカイザーに変身すると、キングライドブッカーをソードモードに変えアクアの剣とぶつけ合う。いつの間にかどこかのドームに変わり、観客席を間に挟みながら剣をぶつけ合っていく。そして互い

に一撃を浴びせるとアクアは武器を納め、支配と覚醒の虹を出現させる。

「な、お前らだったのか！」

「まあ、そういう事さ。今回はただの自己紹介だが、次の世界ではもう容赦しないぜ？」

そうやってアクアはその赤い複眼を輝かせながら虹の中へ消え、デイクイザーの変身を解くと元の世界へ戻る。

(あいつは一体何だったんだ？そしてエレメントとは？)

と考えながら帝は奏牙の城へと戻るのであった。

〈午前9時〉

約束の時間となった朝、二人は思い出の教会へと来ていた。まわりにはファンガイアの気配も邪魔をする者のいる気配はない。ただ、感じるのは教会の中から感じる執念だけだった。

「なあ、帝よ。」

「……何だ？」

「もしもの時だから教えておく。貴様を全てを支配する魔帝と俺に教えたのは、白いドレスの少女を中心とした何人かの男女の集団だと。」

「……ありがたいが、これから俺達が行うのは説得だ。死に行くと戦士じゃなくて、一人の皇帝としてもう一人の皇帝を止めるんだ

という覚悟と親友の悲しみを知らなかった罪を背負うという覚悟の二つが分かる表情で奏牙は呟きだした。

「響は、お前の響はこんな事で復活しても喜ばないぞ！」

「何？」

「あいつがいつも望んでいたのは何だ！何かを失ってまで壊してまで新たな世界を築いて自分を蘇らせることじゃない！人間もファンガイアもずっと一緒に平和に暮らしていける世界を作る事だつたろう……確かにお前の悲しみを癒せなかった俺にも罪はある。でもこれからは！俺が、いや俺達が響の分まで生きて一緒に平和な世界を作るう！もう絶対にお前を一人で悲しませやしない！」

「……それがお前の答えか？」

「ああ。」

「……笑わせるな！俺に大事なのは響だ！お前や地位や共存などどうでも良いのだ！」

そう絶人が叫んだ時、帝が反論するように叫ぶ！倒れそうになった奏牙を支えながら。

「どうでもよくはない！こいつはお前が変わったのは自分のせいだと、悲しみを分かってやれなかった自分のせいだ！いつも罪の意識に捕らわれていた。それでも今までこの世界の平和を守り続けてくれたのは何故だと思う！それはな、響やお前そして部下やこの世界に住む者全てに支えられていたから！そして自分も皆を支えたいと思いつけていたから！大事なのは一つの事や過去の事に集中するん

じゃなく、物事全てを見ることとお互いに支え合って行くことだ！
だからお前もまずはこいつを見習ったらどうだ！」

帝の言葉に表情を歪ませながらダークキバットに腕を噛ませ、絶人は叫んだ。

「貴様は一体何者だ！」

奏牙がしっかりと踏みとどまったのを確認すると、デイカイザードライバーを装着しキングライドブツカーから1枚のカードを取り出し見せつけると叫んだ。

「平和という支配を与える通りすがりの元帝王だ！しっかりと頭に覚えとけ！変身！」

「俺達も行くこう、シャイキバ！」

「おう！いつでも行けるぜ！」

「行くぞ、絶人！変身！」

自分を表す言葉を言い放つと、隣の奏牙もシャイニングキバットを腕に噛ませ二人は同時にデイカイザーとシャイニングキバに変身する。そして絶人も叫びながらメツバットセイバーを引き抜き、闇の波動と共にダークキバへと変身する。

「いでよ！我が下部達よ！」

ゼツバットシールドから赤黒い光を放つと教会の床から大量のファンガイアを出現させる。しかし、すぐさまシャイニングキバが光線

を放ちファンガイアを吹き飛ばすとその煙の中からディカイザーがクイーンドライバーを撃ちながら近づいてくる。

「無駄なあがきを！」

「無駄じゃないさ！」

光弾を弾きながら空間を歪める程の斬撃を放つダークキバに対し、キングライドブツカーをソードモードに直ぐ様変え、鏢競り合う。そこに間髪入れずシャイニングキバが光のザンバットソードを振り下ろすがそれはゼツバットシールドによって防がれる。さらにディカイザーとシャイニングキバが連続で斬撃を放っていくが、ダークキバはそれをメツバットセイバーとゼツバットシールドでうまく防御しながら二人を吹き飛ばす。

「甘い甘い甘い！甘すぎるぞ！そんなので俺を止められると思うのか！」

追い打ちを掛けるかのごとく、赤黒い光弾、光線、斬撃波を放ち教会の壁の一部ごと吹き飛ばす。

「フツ……俺に逆らうからこうなるんだ……響さえいればそれでいい。」

そして後ろを振り向いた瞬間、何かがぶつかってくる。そしてもう一度振り向くとそこにはほぼ無傷で立っているディカイザーとシャイニングキバが光弾を放った後のようだった。

「何度でも言う、響が望むのは平和！復活じゃない！」

「今度はこっちの反撃だ！」

「俺はそれよりも、愛が欲しいんだよおおおおおおお！」

二人の言葉に激怒したダークキバはメツバットセイバーとゼツバットシールドを合体させ「ゼツメツバットソード」にすると、ウエイクアップフェッスルを何度も叩きメロディを奏でる。

「ウエイクアップ！オーバー！」

「真！絶滅ザンバット斬！終わってしまええええええええええ！」

赤黒い虹の光を纏ったゼツメツバットソードを振り下ろし、ディカイザーとシャイニングキバを襲う。それをシャイニングキバが光の壁で防ぐが直ぐ様ひびが入る。しかし少し防ぐだけで良かった、何故ならディカイザーが新たに虹色の縁と金で彩られたカードにシャイニングキバが虹色の複眼とマントの姿で三本のザンバットソードと一緒に描かれたカードを発動できたからである。

『ファイナルウェポンライド！シャ、シャ、シャ、シャイニングキバ！』

「くすぐりも痛みもないぞ！」

「な、何だと!?!」

そしてディカイザーが両手で背中に触れると、シャイニングキバの胸の中から虹色のザンバットソードが現れ、シャイニングキバの複眼とマントを虹色に変える。それに反応するかのように、光と闇のザンバットソードが合体し回転、強力な斬撃をそのまま跳ね返しゼ

ツメツバットソードごと外へ吹き飛ばした。それによってゼツメツバットソードが破壊され、ダークキバも全身の装甲にひびが入った状態で倒れていた。

「ば、バカな……その力は何だ！」

ダークキバはボロボロの状態で立ち上がり、叫ぶとシャイニングキバは静かに呟いた。

「帝との絆の力だ！」

「ふ、ふざけるなああああああああ！」

「ウエイクアップ2！」

ダークキバはウエイクアップフェッスルでダークネスバーストエンドをそのまま走って放ってくる。それに対し、デイクイザーはもう1枚の虹色の縁のカードを発動した。

『ファイナルアタックライド！シャ、シャ、シャ、シャイニングキバ！』

それに合わせ、虹色に輝く聖なるザンバットソードを矢のように闇と光とザンバットソードを弓のように構え、どんどん光を集める。

「響かせる。お前の思いを！」

「ああ！」

そして完璧に光がたまるとザンバットが剣の先端に移動、そしてそ

のまま聖なるザンバットソードを放つ。それはダークキバを貫き、いつの間にかそれを後ろにいたデイカイザーがキャッチ。光と闇を纏ったザンバットソードを構えながら走ってきたシャイニングキバに合わせデイカイザーも走り、そして同時にダークキバを斬り裂く。その必殺技の名前は「デイカイザーレクイエム」、それを食らったダークキバは全身のひびから光を放ちながら眩いた。

「そうか……間違っていたのは……俺の方か……」

「お前の響への愛は間違いじゃない。だけど、方法を間違えていたんだ。」

「お前の思い……やっと……分かった……もうちょっと早く……分かった……」

そして白い光と共に、彼は消滅した。シャイニングキバは静かに、仮面の奥で泣いていた。そして彼は呟く。

「あいつは……救われたのだろうか……」

「お前の思いが分かったんだ……救われたんだろうよ。」

シャイニングキバは闇のザンバットソードを地面に刺す。そして振り向くと変身を解きながら、同じく変身を解いた帝へ言った。

「ありがとう、帝。」

「フツ……俺はちょっと手伝っただけさ。」

そして二人は空を見る、あの世でやっと再会した親友とその親友に

愛された少女の事を思いながら……

（翌日）

帝と起きた冬花、そして奏牙はそれぞれトランペットとフルートとヴァイオリンを演奏していた。それはまさに絶人の悲しみが起こした事件で命を失った者達全ての魂と絶人と響に安らぎを与えるためのレクイエムとなっていた。

そして……演奏を終え、帝と冬花は城の門の所で奏牙に別れを告げていた。

「さびしくなりますね。」

「ああ。でも、俺はあの二人の分までこの世界を平和で有り続けられるようにしていくさ。」

「頑張れよ。俺達も、頑張るからな。」

「もちろんだ！」

そして三人は握手し、それぞれの家へと戻っていく。奏牙は世界の平和のために、帝と冬花は他の世界を救うために……

（しかし、あの冬花の変化は一体？）

と考えながら、帝と冬花が家に入るとシャイニングキバとダークキバが描かれていた絵画の絵が変わっていた。

「あっ！奏牙さん達の絵になってますよ！」

「確かにな……」

その絵はヴァイオリンを演奏している奏牙を見守るかのように、空から絶人と響が穏やかな笑顔を浮かべているようで、横には薄く向かい合っているシャイニングキバとダークキバが映っていた。それを近くで見ようとした冬花が手に取った瞬間、絵が再び変わりだす。

「こ、これって……」

「次は、ツヴァイの世界のようだな……」

映っていたのは暗い空間で、オレンジの複眼を光らせる青いラインが特徴の戦士だった……

第3楽章 〽️ 思いをレクイエムに乗せて 〽️ (後書き)

次回はファイズ系の世界です。

設定その2（前書き）

今回はディカイザーの使用するカードについての設定です。数は多いですが、全て使われるかは不明。

設定その2

デイクイザー所持カード設定

↳昭和ライダーカード設定↳

デイクイザーは世界と全ライダーの意思で生まれたと言っても過言では無い。それを象徴するかのごとく、平成だけではなく昭和のライダー達にも変身が可能となっている。昭和ライダーズのカードの特徴はそのほとんどに、アタックライドやフォームライドが少ないもしくは存在しない代わりにバランスが取れており、どんな状況にでも対応出来ると言ったところである。

弱点やデメリットがあるとすればやはり、アタックライドやフォームライドがほぼ存在しないためにさらに強力な攻撃などを行える場合が少ない事と同じカードばかり使い続けて相手にパターンを読まれる危険性があるために帝並みの存在で無ければ、扱うのは難しい物となっている。

↳所持昭和ライダーカード一覧↳

- ・1号(アタックライド有り)
- ・2号(アタックライド有り)
- ・シヨッカーライダー?1〜6(アタックライド有り)
- ・V3(アタックライド有り)
- ・ライダーマン(アタックライド有り)
- ・X(アタックライド有り)
- ・アマゾン(アタックライド有り)
- ・ストロンガー(アタックライド、フォームライド有り)
- ・スカイライダー(アタックライド有り)
- ・ZX(アタックライド有り)
- ・BLACK(アタックライド有り)

- ・RX (アタックライド、フォームライド有り)
- ・シャドームーン (アタックライド有り)
- ・真 (無し)
- ・ZO (アタックライド有り)
- ・J (アタックライド、フォームライド有り)

↳平成ライダーカード設定

昭和ライダーカードとは違い、枚数、アタックライド、フォームライドがかなり多く、昭和以上のパワーと手数を持つ。しかし、万能というわけでは無く強力なカードを使用したり、何枚ものカードを同時併用すれば例え帝であれど、とてつもないくらいに疲労してしまふ。さらに通常の状態であっても昭和の方より負担が大きく、長期戦には向いていない。そのため帝は常に状況によって昭和と平成ライダーのカードを使い分けていかなければならないのである。

クウガ (アタックライド、フォームライド有り)

アギトライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り。マイルドとV-1は除く)

龍騎ライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

ファイズライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

剣ライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

響鬼ライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

カブトライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

電王ライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)

キバラライダーズ (アタックライド、フォームライド、オリジナル有)

り)
Wライダーズ(アタックライド、フォームライド、オリジナル有り)
オーズライダーズ(アタックライド、フォームライド有り。プロト
バースは除く)
フォーゼ&オリジナルライダー(不明)

因みに奥の手として「禁断のカード」と呼ばれる物を何枚か所持しているがどういったものかは不明。

↳デイクイザー専用カード設定↳

デイクイザーはデイクイド、ディエンド以上の力を持ったライダーとされている。それを証明するかのごとく、他の次元を超えるライダーには無いカードや技を発動する事が可能となっている。色々組み合わせると新たな力が生まれることもある。

↳アタックライド(攻撃系)↳

スラッシュ(黄金の光刃を纏わせ強力な斬撃を放つ)

クロススラッシュ(キングとクイーン両方に黄金の光刃を纏わせ、スラッシュ以上の威力を持つ斬撃を連続で放つ)

ビックスラッシュ(大剣もしくは長い太刀のような黄金の光刃を纏わせ重い一撃を放つ)

ステイングスラッシュ(黄金の光刃を纏わせ、高速かつ正確な突きを連続で放つ)

ウェーブスラッシュ(黄金の斬撃波を敵に飛ばす中距離専用の技)

フレイムスラッシュ(真紅の炎の刃を纏わせ敵を斬る。敵を少し燃やすレベルから極焰並みのレベルまで出力を調整可能)

アクアスラッシュ(青い水の刃を纏わせ敵を斬る。高圧水流のように何でも斬れたり、鞭のように伸ばす事も可能)

サンダースラッシュ(黄色い雷の刃を纏わせ敵を斬る。少し離れた敵に放電したり、電気ショックや黒こげになるほどの電撃を浴びせ

ることも可能)

ウィンドスラッシュ(緑色の風の刃を纏わせ敵を斬る。風の力で敵を高速で斬り刻み、カマイタチを放ったり回転させることで竜巻を起こせる)

アイススラッシュ(水色の氷の刃を纏わせ敵を斬る。ただ凍らせるだけでは無く、冷氣放射や湖を一瞬で凍らせる程の一撃を放つことが可能)

ポイズンスラッシュ(紫の毒の刃を纏わせ敵を斬る。様々な効果や強弱、時間差に調整でき最大レベルはいかなる物も30秒ほどドロドロに溶かす)

ライトスラッシュ(白銀の光の刃を纏わせ敵を斬る。戦意を奪ったリ、癒しを与え邪悪を浄化する事も可能)

ダークスラッシュ(漆黒の闇の刃を纏わせ敵を斬る。恐ろしい破壊力を持ち、敵の命を奪うと傷などを回復できる)

ブラスト(黄金の光弾を連続で敵に放つ。ホーミング弾やスプレット弾のように放つ事も可能)

ツインブラスト(キングとクイーン両方からぶらすと以上に強力な光弾を広範囲且つ大量に放つ)

レーザーブラスト(黄金の光線を放ち、攻撃するだけでは無く光線が通った場所を爆発させる)

チャージブラスト(黄金のエネルギーを集め強力な光弾を放つ)

ナパームブラスト(山なりに飛ぶ爆発する黄金の光弾を放ち、広範囲を攻撃する)

スナイプブラスト(遠く離れた敵を打ち抜く高速の光弾を1発ずつ放つ。距離は最大で5000m)

ピットブラスト(浮遊する光弾を最大8発放ち、それぞれを自由自在に操る。本人の集中力と正確さが大事)

フレイムブラスト(フレイムスラッシュのような真紅の火炎弾を連続で放つ。火炎放射も可能)

アクアブラスト（アクアスラッシュのような青い水流弾を連続で放つ。水流放射も可能）

サンダーブラスト（サンダースラッシュのような黄色い電撃弾を連続で放つ。電撃放射も可能）

ウィンドブラスト（ウィンドスラッシュのような緑色の疾風弾を連続で放つ。竜巻をそのまま放つ事も可能）

アイスブラスト（アイススラッシュのような水色の氷結弾を連続で放つ。冷氣放射も可能）

ポイズンブラスト（ポイズンスラッシュのような紫色の猛毒弾を連続で放つ。毒液や毒ガスを放つ事も可能）

ライトブラスト（ライトスラッシュのような白銀の光弾を連続で放つ。閃光弾や光線を放つ事も可能）

ダークブラスト（ダークスラッシュのような漆黒の暗黒弾を連続で放つ。闇の波動や重力弾、ブラックホールを放つ事も可能）

（アタックライド（防御・特殊系））

バリア（デイクイザーの前方のみにどんな衝撃にも耐えることの出来る黄金の壁を出現させる。後方や横が守られず、動けなくなってしまうのが欠点）

リフレクト（デイクイザーの周りに全てを反射させる黄金のバリアを張る。強力な衝撃や連続攻撃、同時攻撃には耐えられない）

インビジブル（デイクイザーや指定した存在の姿を見え無くさせる。逃走や時間稼ぎに有効）

スキャン（透視、赤外線、サーモグラフィーの効果を与えデイクイザーの視覚を強化する他、対象物の情報を得ることが出来る）

ミラージュ（デイクイザーの幻影を出現させる、イリュージョンの劣化版。主に時間稼ぎなどに使われる）

イリュージョン（実体のある分身体を最大で7体出現させ、同時攻撃を行う）

このカードをディカイザーは確かに所持されていると思われるが実際に使われたカードはまだまだ少ないし、未使用な物や存在が不確かな物もまだまだ存在する。ディカイザーの戦いと旅はまだまだ始まったばかりなため、これからの活躍が期待されている。

設定その2（後書き）

あくまで設定ですが、色々使っていけるよう努力していきつと思います。

再会と遭遇（前書き）

ツヴァイは最後にちょっと登場します。後、二人目のエレメントも少し出ます。

再会と遭遇

シャイニングギバの世界に平和という支配を無事与えることに成功した元世界の帝王、天海地帝こと仮面ライダーディカイザーと、妖刀雪月花を片手に帝と旅をする女子高生、月海冬花。二人がたどり着く世界に待っているのは希望か絶望か、世界の意志ですら分からないこの旅を二人は乗り越えられるのだろうか……

「ツヴァイの世界……か……」

絵柄が変わり、新たなライダーを描き出した絵画を見ながら呟く帝。その絵画を取りまじまじと見つめる冬花。二人は少し黙り込むと同時に呟いた。

「ピццаが食べたいな……」

どうやら二人は考えすぎてお腹が空いてしまったようである。帝は電話でピццаの出前を頼み待っている間にカードの整理とエレメントについての考察をし、冬花も雪月花の手入れをしていた。

（そういえば、冬花が変化したあの暴走形態。あれは何だったんだ……）

エレメントの事を考えつつも冬花に秘められし力の一端を心配する帝。チラッと冬花を見ると、冬花もこっちを見ていてニコッと笑う。それを見た瞬間、帝は物凄いスピードで顔を赤くする。

（な、何だこの笑顔！す、すげえ綺麗だ……ハッ！いけないいけない、変な妄想をすることで……俺の仲間の事を思

い出すんだ・・・シャイニングキバの元になっっているキバに変身する渡はディケイドと俺じゃまるで態度が違ったからな・・・観察者としての対応と親友としての対応って奴かな。そして忘れちゃいけないのがツヴァイの元となったであろうファイズに変身する乾巧、通称たっ君だ。まあ、あいつはその呼び方やめる！とか言っ結構面白かったな。あいつら何やってんだろ？)

「あ、はい。帝さん、ピザ取ってきますね。」

「おう頼むぜ。」

考え事の途中でインターホンが鳴ったので思考を一時中断。そして冬花がピザを取りに行き、帝も今度は1枚1枚カードを確認していく。途中でブレイドのカードを某オンドウル王子のように投げたり、カブトのカードを天高く掲げてみたりして時間を潰しているが、中々冬花が帰ってこない。このままじゃ熱々トロトロなチーズが固まるだろ！と思った帝が玄関に向かうと口論しているような叫び声が聞こえる。良く耳を澄ますと・・・

「だから！マヨコーンと牛カルビを頼んだはずですよ！なのに何でポテトとバターベーコンなんですが！」

「うるせえ！腹の中に入りやあ同じだろ！てかおいしいピザをせっかく持ってきてやったのに何だその態度は！」

「ふ、二人とも落ち着きましょう・・・」

「^{あなた}渡はだまつてる（邪魔しないでください）！」

その口論に耐えきれなくなった帝は飛び出して大きく叫んだ。

「うるさい！俺は四つとも頼んだんだ！てか早くしないとチーズがかたま……るだろ？」

帝が叫びながら見た人物は先程思考の中で思い出していた親友であり仲間である二人だった。

「渡！たっ君！」

「お久しぶりです、帝さん。」

「おう……てかつその呼び方やめろ！恥ずかしいんだよ！」

「えっ……知り合い？」

帝が懐かしむように呟いた二人とは仮面ライダーキバに変身する人間とファンガイアのハーフ「紅渡」と、仮面ライダーファイズに変身するぶつきらぼうだが心優しいウルフォルフェノクの「乾巧」通称たっ君である。冬花をそっちのけに再会を楽しんでいる三人はそれぞれの性格を表したかのような反応をする。

「よし、二人とも。中で一緒にピZZァを食おうぜ。」

「いえ、お構いなく。」

「いや、この際一緒に食おうぜ。」

そして中へと入っていく三人を呆然と見ていた冬花は、ハツとなっ

て急いで床に放置されていたピZZザを持って居間へ戻っていった。

「いやあ、まさか映司の他にもこうして会えるとはな〜どうだ皆元気か？」

「はい。皆それぞれの自分の世界でやれることをやっています。」

「最近原点とリイマジが融合したおかげで結構にぎやかだな。」

「そうか・・・なあ、雅人はまだ俺のベルトを狙ってるのか？」

「いや、それがようやくあきらめたらしくてな。自分を見つめ直してくるとかで旅に出ってたぜ。」

「渡の方は？ネガの世界から音也が帰って来たんだろ？」

「ええ。何だか最近は大ークライダー達によるコミュニティまで作り始めました。」

とそれぞれ話し合いながらピZZザを食べていく。因みに雅人とは仮面ライダーカイザに変身する青年の名前で、音也とは大ークキバに変身する渡の実の父親である。そしてピZZザを何枚か食べていたとき、巧は冬花のある仕草を見てあることに気づく。

「・・・おい、お前まさか猫舌か？」

「えっ？・・・あゝ、はい。ちょっと熱い物は苦手なんです。」

すると男二人で座っていたのに巧が急に冬花の隣に座り、目をキラキラさせ（帝達にはそう見える）ながら話し始めた。

「俺は乾巧。仮面ライダーファイズで今はクリーニング屋とピザ屋のバイトをやってる。よろしくな……後さっきは怒鳴って悪かった。」

「いえ、こちらこそ。……もしかしてあなたも？」

「ああ。俺も猫舌だ。」

「本当ですか！？私、月海冬花って言います！よろしくお願いしますね！」

どうやら猫舌同士で気が合うようで、その様子を帝と渡は苦笑しながら平和そうに眺めていた。それから数十分後、渡と巧はそれぞれ時々こうして会いに来るかもしれないという事とまたいつか会おうと約束をして帰って行った。

「さて、俺達も行くのか？」

「はい。この世界も早く助けてあげましょう。」

そして二人が外に出ると、服装が変わっていた。帝は白色のどこかの学校の学ランで、冬花は青いブレザーにミニスカートで白い手袋を履き、網タイツとブーツにお嬢様風の帽子という服装を着ていた。

「なんだそれ？」

「さあ？分かりませんが……少しきついです。」

いや少し所の問題ではない。冬花の制服は結構サイズがきつく、色

々な部分を強調しすぎていた。帝はそれにドキドキしながらそれをごまかすかのごとくポケットや鞆をあさり、生徒手帳に書かれていた「スマートブレイン学園」へと向かった。それを近くの建物から見下ろす、冬花より少し小さい緑色のドレスに身を包んだ少女が居たという事に気づかず……

「スマートブレイン学園」

帝と冬花が到着したスマートブレイン学園は、男子は白色の学ランで女子が青いブレザーというのが決まりらしく男子生徒と女子生徒がそれぞれ細かい所は違えど、帝達と同じ制服を着ていた。

「うむ。ここがスマートブレインの経営している学校だったのは分かったが、何をすればいいかは分からないな。」

「そのオルフェノクって何なんですが？」

「あゝ、それは『ぎゃあああああああ！』あの悲鳴を上げる灰色の怪人のことさ。」

帝達が悲鳴の聞こえた方向を見ると、蛙の特徴を持つフロッグオルフェノクがアルマジロの特徴を持つアルマジロオルフェノクにボコボコにされていた。

「た、助けてくれ〜」

『無駄だ！貴様はラッキクローバー親衛隊の俺様に傷を付けたんだ……罰を与えてやる！』

そしてアルマジロオルフェノクが右手に持っていた剣をフロッグオルフェノクに振り下ろすが当たる事は無かった。何故なら冬花が雪

月花を鞘に収めている状態で防いでいたからだ。

『おい貴様！俺の邪魔をして「いいんでしょ！」ぐはあああああ
』！』

冬花はそのままアルマジロオルフェノクを蹴飛ばし、抜刀。髪と目つきを変化させると斬り込んでいった。

「あゝあ。冬花ってああなると止められんぞ。」

『あの、あなた達はまさか今日転校してきた…………』

「ああ、天海地帝。あつちは月海冬花だ、お前は？」

フロッグオルフェノクは、しっかりと制服を着たおとなしめの眼鏡を掛けた男子となる。その男子は眼鏡を綺麗に拭いてから呟いた。

「僕は伊藤健吾。二人が転入する2年C組のクラス委員長をやっているんだ。」

「なるほどな、それで？あの幸せ四つ葉親衛隊に襲われた理由は？」

「えつと…………ただ肩をぶつただけで…………」

その理由に帝が啞然としてみると、二人の近くまでアルマジロオルフェノクが飛ばされてくる。状態はもう健吾以上にボロボロで息も絶え絶えであり、灰もいくらか出ている。冬花はというと…………

『許さない…………そんなくだらない理由で…………』

少しエコーの掛かった声で髪に刀のように青いメッシュを入れ、結晶の翼を2枚から4枚に増やした状態のまま呟くと刀を納刀し元に戻る。

「あれ……？私は何を？」

『しめた！くらえ蛙野郎！』

冬花が戸惑っている内に、直ぐ様回復したアルマジロオルフェノクが強そうな右ストレートを放ってきたが帝は片手一つで抑えつけそのままカードを入れた状態のディカイザードライブバーを装着し、バツクルを閉じた。

「変身！」

『カメンライド！ディカイザー！』

『な、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！』

アルマジロオルフェノクが叫ぶのと同時に、帝の体にディカイザーのラインなどが金色の光を放ちながら流れるとほぼディカイザーの姿となって一気にライドプレートが顔に突き刺さり、光が放出されると共に仮面ライダーディカイザーへの変身を終えた。

「さあ、お前にはこいつで十分だぜ。」

『カメンライド！カイザー！』

一枚のカードをドライバーに入れて発動すると、先程のディカイザーに変身したときのように今度は黄色の光のラインが流れ、光を放

出すると共に姿を変える。黄色い を模したラインと紫の複眼を持つファイブライダーの一人である仮面ライダーカイザへと変身した。

「うそ！帝君が!？」

「おい、あいつ仮面ライダーになったぞ！」

「生徒会長にしかねないのに!？」

と健吾を含め、戦いを見ていた生徒達が驚きながらそれぞれの言葉を呟いていく。それを気にすることなくキンググライドブッカーをガンモードにするとさらにもう一枚カードを発動した。

『アタックライド！カイザブレイガン！』

カイザの専用武器である「カイザブレイガン」を右手に出現させ、キングライドブッカーと合わせて連射していく。

『があああああああ！』

「お前をこのまま倒す……って事でいいのかな？」

某ヤンデレな幼馴染みのように呟くと両方の武器をブレードモードに変え、どんどんアルマジロオルフェノクに斬撃を放っていく。アルマジロオルフェノクもパンチャキックを放っていくが全部躲され返り討ちにされてしまう。

「ディーカイザー！ディーカイザー！ディーカイザー！」

戦いを見ている生徒達がカイザコールを送ると、ディカイザーカイザ DKKはそれに手を上げて応える。そして、ライドブッカーを納めると2枚のカードを発動した。

『アタックライド！カイザポインター！ファイナルアタックライド！力、力、力、カイザ！』

「まあ、オルフェノクは元々人間だし……とどめは刺さないから安心しな！でいやあああああああ！」

カードの効果でカイザポインターを付けたDKKはストレートキックと共に黄色い四角錐のターゲットサイトを放ちアルマジロオルフェノクを動けなくすると、そのターゲットサイトにドロップキックで突っ込む必殺技「ゴルドスマッシュ」を放ち、アルマジロオルフェノクをドリルの様に削るとそのままアルマジロオルフェノクの後ろに黄色い光と共にディカイザーの姿に戻った状態で出現する。それと同時にアルマジロオルフェノクは青い炎と共に爆発し、黄色いマークを浮かび上がらせる。人間の勲章をいくつか付けた生徒は白目を剥いた状態で気絶していた。

「わあああああああああ！」

それと同時にわき上がる歓声にディカイザーは手を振りながら仮面の奥で笑っていた。

（やべえ。俺なんかすごい存在になってる。）

と思っていると、突然どこからか青い薔薇の花びらが舞ってくる。その方向を見るとそこにいたのは一人の青いブレザーをゆったりと着こなし、たくさんの勲章を胸ポケットの部分に付けロングスカ―

トと革靴を履いている茶髪の髪の一部をポニーテールにしている少女がいた。

「あの親衛隊のお方を吹き飛ばしたのはあなたですか？世界の元帝王さん。」

「……ここにも俺をそう呼ぶ人がいるのか。まあいい、質問の答えはYESだけ？」

「そうですね……結構あのお方は強い部類なんですが、仕方ありません。あなたの実力を確かめさせてもらいます。」

「もしかして……あんたか？」

「……どうでしょうか？ただ私はあなたを悪いお方では無いと思っていますので。」

「模擬戦だな……なら、いいぜ？……来な。」

その少女は、ディカイザーとある程度の会話を終えると懐から青を主体としたボディに銀のラインや装飾をつけたベルトと液晶部分の大きい携帯を取りだし、ベルトを腰に装着。その携帯に何かを入力すると、とある電子音声と共に携帯を顔の部分まで持ってきて斜めに構えると呟いた。

『スタンディングバイ』

「変身。」

『コンプリート』

ベルトに携帯を斜めに差し込み、そのまま横に倒すともう一つの電子音声と共に彼女の体を複雑な形を描きながら青い光のラインが彼女を包み込んでいった。

「まさか……すぐ会えるなんてな、仮面ライダーツヴァイ！」

デイクイザーが叫びながら見つめるその先には、白銀に輝くボディに金色の装甲を持ち、オレンジ色の複眼を輝かせるギリシャ文字のとをいくつも組み合わせたような形の青いエネルギーラインとマスクを持つ戦士「仮面ライダーツヴァイ」が優雅に立っていた。

再会と遭遇（後書き）

原典ライダーの二人の性格はちゃんと表せたでしょうか？ツヴァイの戦闘力は次回にわからせていこうかと思えます。後、変身に使ったのはiphoneです。

実力、シグマ、竜巻（前書き）

サブタイは今回の話を見ていれば分かるかと思います。

実力、シグマ、竜巻

仮面ライダーディカイザーこと天海地帝は、とある崩壊しかけた世界の住人で支配と覚醒の虹を通り抜けた少女、月海冬花と共に世界に平和という名の支配を与えるための旅をしていた。その二つ目の世界「ツヴァイの世界」で懐かしい友との再会の後、向かったスマートブレイン学園で自分たちの転入するクラスのクラス委員長でフログオルフェノクである伊藤健吾を、ラッキークローバー親衛隊という組織に所属しているアルマジロオルフェノクから抜刀した後の様子がおかしい冬花の助けもあって撃退（と言う名の気絶）するが突如現れた少女がツヴァイに変身し、ディカイザーとの戦いを始めるのであった……

「始めに名乗っておきます。私はこの学園で生徒会長をしている蔡文姫鳳姫さいぶんきほうめいです、以後よろしくお願いしますね。」

「俺は世界の元帝王の天海地帝、またの名を仮面ライダーディカイザーだ。」

お互いに自己紹介を終えると、ディカイザーはキングライドブッカーをソードモードで構え、ツヴァイはベルトにセットされたiphone型の変身端末「ツヴァイフォン」の液晶画面をタッチする。

【ツヴァイムバー】

そして一つの電子音声と共に彼女の右手の中に球体状の光が生まれ、銃の様な形になると光が消えはつきりと形を映す。

（どうやら、デルタムバーみたいな武器の様だ……つまり遠

距離なわけだが、こっちがあっちの懐に飛び込めばあるは……
)
とデイカイザーがファイズの世界のライダーの一人、デルタの持つ武器を思い出しつつ考えているとツヴァイがムーバーの照準をこちらに合わせているのに気がつき、右に側転すると今までの場所にレーザーが飛んでくる。それに合わせデイカイザーは突っ込んでいくが……

「近距離ですね……ならばこれです。」

【ムーバーエッジ】

「何!？」

ツヴァイが再びツヴァイフォンの液晶画面にタッチすると、先程とは別の電子音声が流れツヴァイムーバーの形を変える。ツヴァイムーバーの持ち手が垂直になるように曲がり、銃口らしき部分からはツヴァイの全身にあるエネルギー流路「フォトンストリーム」の中を流れる強力なエネルギー「フォトンブラッド」と同じ青色の光刃が生まれていた。

そしてデイカイザーの振り下ろそうとしていたキンググライドブツカ―をはじき飛ばし、連続で斬りつけ左足で思い切り蹴り飛ばす。

「ぐはっ!……っ、強え……奏牙とはまた違う感じで強え……」

「お褒めいただきありがとうございます。では今度はこれはどうでしょう?」

学園の芝生のある広場に建てられているオブジェに叩き付けられた
ディカイザーがツヴァイの力に驚愕していると、再びツヴァイがベ
ルトのツヴァイフォンの液晶画面にタッチした別電子音声を響
かせる。

【ツヴァイガトリング】

「が、ガトリングだと!？」

光に包まれムーバーエッジの形が大きく変わっていく。そしてムー
バーをトンファアの様子に構えた形で銃口の下には大きな機関砲が装
着され銀と青のラインで彩られた「ムーバーガトリング」の引き金
を引くと、青い光弾がこれでもかというくらいにディカイザーに直
撃する。

「うわああああああっ!」

体中から火花を散らし、今度はいくつものオブジェを壊しながら地
面に叩き付けられる。そしてツヴァイがムーバーに戻した状態で近
づいてくるのを見ながらディカイザーは一枚のカードを取り出した。

「新しい力を試すでしょうか!変身!」

『カメンライド!シャイニングキバ!』

「……!なるほど、そうやって姿を変えるんですね。」

ツヴァイが感心している間に、ディカイザーが白銀の波紋と共に姿
形を変え何かをはじめ飛ばす様な音と共にディカイザーは新たな
姿、Dシャイニングキバとなりさらに一枚のカードを発動した。

『アタックライド！ヒカリノザンバットソード！』

そして右腕から引き抜くようにして、全てを白銀に染めた光の皇帝のみが持つことを許された「光のザンバットソード」を左手に構えると光速でツヴァイに近づき連続で斬り裂いた。

「きゃあ！……急に力加減が変わりましたね……」

「そうか？あまり変えてはいないぜ？」

ツヴァイは大きく吹き飛ばされながらも何とか着地し、DKSの強さの違いを呟きながらムーバーを連射するがDKSはそれに答えながら光の壁を最小限の大きさで発生させて防ぐ。そして再び光速で近づき斬り裂こうとするが……

「そう何度も食らいません！」

【ムーバーウィップ】

ツヴァイフォンの液晶画面をタッチし、別の電子音声と共にツヴァイムーバーをムーバーエッジの様に変えると銃口部分から青い光の鞭を出現させ、辺り一帯を薙ぎ払うように振り回す。するとDKSの姿が現れ、その腰にはぐるぐるとムーバーウィップが巻き付いていた。

「ハアアアアアアアッ！」

「うおっ！？」

そのまま地面に叩き付けられるのを何回も繰り返され、大きく飛ばされながらも態勢を立て直すとオブジェの上に立って別のカードをクイーンドライバーに挿入し発動した。

「ファイズ系にはファイズ系だよな！」

『カメンライド！ライオトルーパー！』

そして黄金の虚像が重なり、ファイズライダーズの量産型ライダー「ライオトルーパー」を3体呼び出しツヴァイに向かわせる。

「頑張れよ、兵隊さん。」

「そんな！大勢だなんて卑怯です！」

と言いつつも、ツヴァイはライオトルーパー達の攻撃をかわし、斬り裂いていく。さらにツヴァイムーパーに戻し一人ずつ的確に狙い撃ちし消滅させた。

「さすがだな・・・さて、そろそろフィニッシュと行こうか？」

「そうですね。十分あなたの實力という物は分かりましたし。」

二人はお互いに最後の攻撃にすると呟きながら、キングライドブッカーとツヴァイフォンに手を掛けようとしたその時だった。

「会長大変だ！この学園の近くにシグマが！」

胸ポケットに勲章を付けた制服を崩して着ている生徒が慌てた様子でやってくる。それを聞いたツヴァイは驚いた様子で腕を震わせる。

「すみません・・・帝さん、着いてきてください！」

「あ・・・ああ・・・冬花！お前も来い！」

「・・・はっ、はい！」

それぞれ叫ぶと、デイカイザーはマシンデイカイザーに跨がりその後ろにずっと立ち尽くしていた冬花を後ろに乗せ、ツヴァイはツヴァイフォンの液晶画面をタッチしマシンを呼び出す電子音声を響かせる。

【オートバジンツヴァイ】

するとどこからか、ファイズの専用ビークルであるオートバジンを青くし銀のラインを描いているバイク、オートバジンツヴァイが走ってきてツヴァイの目の前で止まりそのままツヴァイが乗り学園の正門から猛スピードで走り去っていき、デイカイザーもそれに冬花を落とさないようにして追いかけた。

生徒達はそれぞれ、興が冷めたように教室の中へ戻っていったり先程の戦闘のことについて語ったりしていたが、健吾だけは何かすごく深刻な表情でデイカイザー達の出で行った正門を睨んでいた・・・

〈学園付近の道路〉

デイカイザーと冬花がツヴァイに着いて行ってやって来た場所は、周りに色々な家のある広い道路だが今は平和とは言える状況では無かった。車は全て爆発した後のように炎を上げており、道路の至る所には衣服と大量の灰が残っていた。

「な、何ですかこれ……？」

「使徒再生だ……」

「えっ……？」

あまりに残酷な風景に言葉があまり出ない冬花の疑問に怒りを込めた声で答えるデイクイザー。そしてデイクイザーは説明する。使徒再生とは人間をオルフェノクに変える行為で適応出来た者はオルフェノクとなるが、それ以外は灰となると。そしてオルフェノクにも種類があり、自然と死んでオルフェノクに覚醒した者は「オリジナル」と普通のオルフェノクがあり、そのいずれも短命であると。

「……でも、私達の世界はそれでも人間とオルフェノクが共存して生きてくれました。でも……シグマが現れてからは……！」

冬花が顔を青くしていると、冬花が今何が起きているかを説明しようとして静かに呟いている時彼女は何か気づく。デイクイザーと冬花もその方向を見るとそこにいたのは大量のオルフェノクと……

「俺が現れてからは何だっつて？ツヴァイ？」

そのオルフェノク達の目の前を歩く強烈な殺気を放っている全身の姿を金色に染め、ギリシャ文字の をモチーフとしたフォトンストリームと緑のフォトンブラッドを持つ真紅の複眼と を90度回転させた触覚を持つ緑のマントと両腰にファイズライダースの一人です最強の部類に入る戦士、オーガの専用武器であるオーガストランザーの長剣モードのような武器を鞘に収めた戦士「仮面ライダーシグマ」が立っていた。

「あなたが現れてからその平和は壊れてしまった！人間や同族のオルフェノク達に使徒再生を行うのではなく、その命を吸って存命しさらに強力な存在となるという考えに共感した者達は今この瞬間も命を奪い続けているんですよ！そんな・・・そんな考え、私は認めたくないです！」

【ムーバーライフル】

ツヴァイムーバーの持ち手の後ろ部分に長いグリップがあり、銃口が長く伸びたムーバーライフルから高速の光弾を放つ。しかしシグマは左腰の鞘から専用武器「シグマ・ストライクテイル」を抜き、光弾を近くにいたソードフィッシュオルフェノクにはじき飛ばす。

「ぎゃあああああああああ！」

ソードフィッシュオルフェノクはそのまま灰化するが、それを気にすることなくシグマは歩き出しツヴァイ達に向かっていく。ツヴァイは何度も引き金を引くが全て弾かれるか、手下のオルフェノク達が盾にされて灰化していく。

「何てやるうだ・・・オルフェノクも元々人間。それを気にすることなくあそこまでやるなんてな！」

「私も許すことが出来ません！」

デイカイザーと抜刀した冬花もシグマに向かっていくがその目の前に突如として緑色の巨大で強烈な竜巻がオルフェノクを何体か巻き込みながら現れる。

「ほう……いいタイミングで現れたな。緑の暴風少女よ。」

ツヴァイとすでにムーバーエッジとシグマ・ストライクテイルで鏢
競り合いをしているシグマが呟くのと同時に竜巻の中から一人の少
女が現れる。黄緑色に輝く髪をポニテにし、同じ色の瞳を持ち同じ
色の少し大きめのワンピースのようなドレスを着た小学生と中学生
くらいの間の身長で麦わら帽子をかぶった殺気を纏っている女の子
が現れた。

「ふふん アクアのお兄ちゃんが言った通り、眩しいお兄ちゃん
だね」

（な、何だ？こいつもエレメントなのか？）

「ハアアアアアアアッ！」

「………！冬花、よせ！」

仮面の奥で帝は疑問に思っていると、冬花がそのエレメントらしき
少女に一気に接近し雪月花を振り下ろすが……

「まだ刀のお姉ちゃんには興味ないよ？」

「………！………きゃああああああっ！」

見えない風の壁で斬撃を防がれ、動きを止められたまま突風によつ
て吹き飛ばされてしまう。そのまま冬花は電柱にぶつかり地面に倒
れると気絶してしまふ。

「冬花！………てめえ、ガキだからって許さねえぞ！」

とディカイザーが叫んだ途端、その少女の目つきが変わる。しかも先程とは比べものにならないほどの殺気と突風が噴出される。

「ガキだと？……勘違いしてんじゃねえよ！世界の元帝王さんよおおおおお！私はこれでも19だ！大学生と同じだぞゴラア！」

（なっ！こんな小さい奴がか！？やばい……こういうときって大体は……）

言い方が荒くなり、自分の言い方も変わった少女に対して一種の危機感的な物を感じたディカイザーの予想は当たり、少女はアクアの男が変身に使ったベルトとクリスタルの棒の緑色に染まった物を合体させ腰に巻き付けるとクリスタルを引き抜き少女は叫んだ。

「変身してやるぞ、世界の元帝王さんよおおおおお！」

「チェンジ！トルネード！」

アクアとは違う電子音声が響き、辺り一帯を吹き飛ばしかねない緑色の竜巻が吹き荒れ少女の姿を変える。その姿はアクアに酷似しているが、背は少女の時より大きく伸び、色も結晶のように輝く緑となり金色のラインに彩られた赤い複眼の戦士「仮面ライダートルネード」となり竜巻を振り払って姿を現す。

「フッ、あれだけの實力なら貴様ごと吹き飛ばしてくれるだろう……
……さらばだ弱き頂点に立つ者よ。」

「くっ！待ちなさい！」

ほぼ互角だったシグマとツヴァイの戦いはシグマが余裕だと感じ撤退した事によって終わったが、ツヴァイは周りに大量にあるシグマの灰化や命を奪われた者達の灰を見ながら膝から崩れ去った。

「ふっ……さて、この姿になったからには死刑確定だよ？世界の元帝王さん。」

（また言い方と性格？が変わった……正直やりにくいぜ……）

先程とはまた言い方が違うトルネードに困惑しながら、ディカイザーはキングライドブツカーとクイーンドライバーを構え突っ込んでいった……

「……………」

気絶していた冬花の瞳が開かれたが、その瞳が妖しく輝いていた事には誰も気づいてはいないのであった……

実力、シグマ、竜巻（後書き）

次回でツヴァイの世界が終わり・・・何とトライRさんの「仮面ライダーディライト」世界の光導者」とコラボです！

限りある命を大切に（前書き）

今回、水音ラルさんの作品の仮面ライダー（のカード）が少し登場します。

限りある命を大切に

ツヴァイの世界で遭遇した、世界に悪の支配を与えるライダーシグマと、性格がほとんど変わる謎の少女が変身するエレメントのライダートルネード。スマートブレイン学園の生徒会長でツヴァイの変身者、蔡文姫鳳姫と共に、元世界の帝王で仮面ライダーディカイザーに変身する天海地帝と、とある世界で支配と覚醒の虹で覚醒した月海冬花はそれぞれ戦いを開始したが、ツヴァイの方はシグマが自分が有利と見て撤退し、冬花はトルネードの少女の攻撃らしい物で気絶、そして今ディカイザーとトルネードが戦闘を開始していた・

『アタックライド！ブラスト！』

ディカイザーは手始めにキングライドブッカーをガンモードにし、黄金色の光弾を連射するが、それら全てはトルネードの発生させる風の壁で防がれディカイザーへと跳ね返って行く。それを回避するとディカイザーはキングライドブッカーをソードモードに変え、トルネードに接近し斬撃を幾度となく放つ。しかしトルネードは腰のベルトからクリスタルのロッドを抜き、緑色の光刃を発生させ受け止めディカイザーと同じくらいの斬撃を放つがこっちの方がディカイザーよりもスピードが速く、ディカイザーの体から火花を散らす。

「ぐおっ！……何て速さだ、俺でもギリギリで見えるくらいだぜ……」

「それだけじゃないわよ。」

ディカイザーが荒い息を吐きながら、トルネードを見ると彼女の両

手に緑色の風を凝縮したエネルギー弾が出現しており、それをトルネードは勢いよく両手を突き出し発射した。

「烈風弾！」

彼女の叫びと共にそのエネルギー弾のスピードはどんどん加速し、最高スピードに達するとディカイザーに直撃し緑色の竜巻を発生させ吹き飛ばす。

「ガハアツ！？うあつ……ぐふつ……」

ディカイザーは数十mも吹き飛び、地面にクレーターを作るほどにめり込んでいた。トルネードは足から竜巻を発生させ近づくとディカイザーの腹部を踏みつける。

「ウグツ！？」

「アンツ、良いわ……あの世界の帝王と言われたディカイザーの悲鳴は格別よ……」

トルネードにはどうやらSな部分があるらしく、ディカイザーを踏みつける度に聞こえる悲鳴による快感で体を震わせていた……そんな時、トルネードは後ろから変な感覚を感じる。

「ん？何かしら……！」

そこには先程気絶させたはずの冬花が無傷で立っていた。しかし様子が違っていた……禍々しい青いオーラを身に纏い、背中からは青い結晶の翼が四枚出現させている銀と青の刃の様に変化し、うねうねと動いている髪をなびかせながら雪月花を抜刀すると三日月

のような歪んだ笑みを浮かべトルネードを斬り裂いた。

「キヤア!?!、いつの間に……」

『帝さんに……手は出させない……私の恩人を……死なせない……』

冬花は青い結晶の刃と黒く長い棒の槍を出現させると狂ったように振り回しながら、トルネードをどんどん傷つけていく。そして青いエネルギーを纏わせた強烈な斬撃でトルネードをデイクイザー以上に吹き飛ばし、変身を解除させる。

「驚いた〜刀のお姉ちゃんはまだまだ覚醒するんだね〜今回はここまでにしておくよ〜」

トルネードの少女に姿が戻っていたため、言い方と性格が最初に現れた時と同じ状態になっていた。そして少女は支配と覚醒の虹を出現させその中へと消えた。それと同時に駆け寄ってくるデイクイザーと動きが遅いツヴァイの方を振り向くと元の冬花に戻り倒れる。それをデイクイザーが支え、そのまま変身をお互いに解きそれぞれバイクに跨がる。

「復活させられなくてすいません……でも忘れません……」

「何か言ったか?」

「いえ、何でもありません……」

悲しげな表情の鳳姫を不思議に思いながら帝は一緒に学園をそのまま目指した……

〜数日後〜

あれから、シグマの発見情報は無く鳳姫も何だか元気が無い。帝は学園の外を歩いていると、そこに勲章を胸に付けた三人の生徒が居た。

「お前らは確か……」

「あなたは転校生の……我々ラツキクローバーに何か用でも？」

帝が話し掛けると、七三分けの眼鏡を掛けたキリツと制服を着ている生徒が答え、その両隣にいる制服を崩して着ている短い金髪の生徒と首の部分だけを開けている茶髪のウェーブが掛かった生徒が帝を見つめる。帝は思いきつてある質問をした。

「お前らの長である鳳姫のオルフェノク態や能力を見た訳じゃ無いんだが……あいつは灰となった人間やオルフェノクを復活させられるのか？」

「……！！」

三人が驚いた表情をし、制服を崩している生徒が怒りのあまりドラゴンオルフェノクになった状態で帝の制服を荒く掴む。

「てめえ！会長の何を狙ってるんだ！言え！」

「やめる龍也！……確かに鳳姫様には灰化してしまつた存在を蘇らせる事が出来るよ……でもそれはいつもって訳じゃ無い……」

茶髪の生徒が何とか引き離し帝の質問に答えると、さらに帝は質問する。

「どつという事だ？」

「あのお方は、限られた命を大事にしている……それだけです。」

「なるほどな。ありがとよ、教えてくれて……百井、鰐塚、辰尾。」

帝は微笑みを見せながら、鳳姫が教えてくれた彼らの名字を呟きつつ、彼女がいるであろう生徒会室へと向かった。

（廃工場）

一方、どこかの廃工場では大量のオルフェノクが機材などが積み上げられた足場に立つシグマを見ている。そのシグマはベルトに備え付けられているiphon型端末「シグマフォン」を取りだし、操作すると緑色の光と共にその正体を現す。その正体は眼鏡を外し、柔らかかそうな瞳では無く鋭い憎悪に満ちあふれた瞳の本物の健吾だった……そして健吾は叫ぶ。

「いいか？お前達は灰化することを恐れず、ずっと生き続けたいという欲望の元に集まった精鋭だ……今日の夜から学園に忍び込み、明日の午前七時に一斉に奴らを襲い大量の命を得るぞ！」

『おおおおおおおおおっ！』

オルフェノク達は勢いよく健吾の叫びに応え、健吾もその表情を歪ませる。彼の秘めている野望は大きかった……それを影から学

園で最初に帝達と出会った影武者の伊藤健吾が見ている事に気づかず……

（生徒会室）

「そうですね、私の秘密を。」

「ああ、でもえらいな……灰化したらすぐ復活させるんじゃないかと、敢えて限りある命だったと自分の心に刻みつけておくなんて……本当はどんどん復活させたいのに。」

その頃帝は、百井達から聞いた全てを鳳姫に話した。そんな鳳姫は怒るところか、ある程度の微笑みを浮かべながら生徒会室の窓から校庭にいる生徒達を見る。そして話し合っていた。

「私は……分からなかったんです。オルフェノクと人間の命の違いという物が……私の復活能力が大きく作用しているのはこの私自身ですからオルフェノクでもずっと生きていられる。でも周りは限りある命があつて、それでも生きている……それが出来ないとなるとなんだか悲しくて……」

帝はそんな鳳姫を見ながらため息をつく、優しく鳳姫の肩を掴み
呟く。

「俺の友達にもさ、そうやって自分は異形だから人間を裏切るんじゃないかってずっと悩んでた奴が居たぜ……でもそいつは今では仲間達と仲良く生きてる。何故か？その仲間達がそいつを受け入れ、あいつをちゃんと支え続けたからだ。今のお前もちゃんと支えてくれる仲間達がいるんじゃないか？」

その言葉にハツとなつて振り向く鳳姫。帝は微笑みつつ生徒会室の入り口に向かいながら、もう一度振り向き呟いた。

「仲間が信じてくれてるんだ……お前も自分とその仲間を両方信じてみるよ。」

「……はい。」

冬花は静かに頭を下げ、帝はそれにうなずきながら生徒会室を出るとそこには健吾が居てビクツとなるが、入れ違いになるように入っていく。そして数時間後に出てきた健吾は何か決意を決めた感じで呟いた……

「僕も、彼女を信じてみたい……」

〈深夜〉

目の前を歩く健吾とそれに付いてくる大量のオルフェノク。彼らは学園の校庭にやってくるとそれぞれ散開しようとして動き出した直後、何かの光が彼らを映し出す。

それは学園の屋上に備え付けられたスポットライトであったが、その屋上から突如何かの影が接近してくると何体かのオルフェノクを吹き飛ばし校庭に着地する。

それはクレインオルフェノクよりもスタイルが良く、全身の至る所に翼を模した装飾や模様があり、背中に翼をたたんだ龍騎ライダーズの一人であるオーデインのような顔の「フェニックスオルフェノク」であり、オルフェノク達にどんどん火炎弾を放っていくが、突如背中から強烈な衝撃が襲いかかる。

その衝撃を放つたのは、ドラゴンオルフェノクよりもさらに厚い装甲と鋭く長い爪と尻尾を持つ巨大な翼を持つ「ワイバーンオルフェノク」だった。

『ほう、生徒達を巻き込まないために自分一人で戦うという訳か。だがこの多勢に無勢な状況では結果は変わらない。』

影が健吾の形に変わり、フェニックスオルフェノクに言い放つ。それに対してフェニックスオルフェノクも影を鳳姫の姿に変え、反論する。

『私は確かに生徒会長失格かもしれませんが。でも……それでも私は！信頼してくれる皆を守り続けていきたいんです！』

『それが貴様を長失格とさせるのだ！我々オルフェノクは誰でも生き続けていきたいと思っている！短命で限られた命など、必要ないのだ！』

「違うな！」

影の健吾の叫びに、反論するように暗闇の中から現れた帝。それに続くように現れた冬花、ラッキクローバーの百井、辰尾、鰐塚も現れる。

「百井君、辰尾君、鰐塚君……どうして？何も言っていないのに……」

フェニックスオルフェノクから人間態に戻った鳳姫が呟くと、ため息を吐きながら百井が答える。

「辰尾が、会長なら怪しい人物に目星を付けてて、何かしでかすんじゃないかって心配してたので。」

「いつもはぶっきらぼつなのに、会長の事には真剣な辰尾君ですわ。」

「うるせ！・・・まあ会長、何かあったら俺達にも相談しろって事ですよ！」

鰐塚は苦笑し、辰尾は照れくさそうにしながら会長に微笑む。それに影の鳳姫も微笑むのであった。その様子が気に入らないのか、ワイバーンオルフェノクは咆哮と共に姿を健吾に戻し、腰にシグマフオンを取り付ける。

「何故だ！俺の計画は完璧で誰にも分からなかった！それに何故、貴様らはそこまでこの長失格の者を信頼できる！」

「お前は上に立つ者と下から支える者とは何かという物自体、分かってない！鳳姫は自分に灰化した存在を復活させる能力があったのに使わなかった！それはその存在の限りある命を自分が心に刻んでおこつという苦渋の決断があったからだ！

普通なら途中で心が崩壊するかもしれない・・・でも彼女はしなかった！それはここにいるラッキークローバーやこの学園の生徒、そして彼女を知る皆が支え続け例え灰化しても復活させなくていいと、心に刻みつけてくれればそれでいいと彼女の決断を受け入れたからだ！

それが分からずに、ただ自分の部下を利用する物としか見られないお前の方こそ長失格だぜ！だからこそ、お前の計画はばれたんだよ！そこにいるフロッグオルフェノクになれるお前の影武者に教えられてな！」

「何だと！」

健吾が振り向くと、影武者をしていたもう一人の健吾が決意のこもった表情で立っていた。そして彼は拳を握りしめ思い切って叫ぶ。

「僕も、僕もこの限りある命を精一杯生きたいんだ……！」

「貴様ああああああっ！」

本物の健吾が叫ぶと、シグマフォンがセットされていたドライバーが自動的に動き、緑色の光のラインが流れ、更に健吾の顔に歪んだ模様が浮かぶのと同時に緑色の光が爆発し影武者の健吾やオルフェノク達を吹き飛ばす。

影武者の健吾は鳳姫が抱え込んで跳び、隠れるように言われたために何とか助かったが、他のオルフェノク達は吹き飛ばされつつ、灰化してしまふ。

その光が晴れるとそこに立っていたのは腰の部分にシグマドライバーとシグマフォンが融合し、緑色のラインが走ったさらに禍々しい装甲と角、翼、シグマ・ストライクテイルが融合し二本に増えた尻尾、鋭く伸びた角を持つ「ワイバーン・シグマ」なる存在であった。ワイバーン・シグマの胸に健吾の顔が浮かび上がるとその顔は大きく叫んだ。

「見る！これが真の長の力だ！全てをひれ伏させる大いなる存在だあああああああっ！」

「暴走してやがるな……鳳姫、冬花、百井、辰尾、鰐塚。あいつを止めるぞ！」

「分かりました！」

「帝さんに協力するのは当然です」

「会長を守るのが我々ですからね。」

「俺は会長のために戦う、てめえのためじゃねえ!」

「素直じゃないんだから……」

冬花が雪月花を抜刀し、百井がムカデの特徴を持つ「センチピートオルフェノク」、辰尾が龍の特徴を持ち厚い装甲の姿である「ドラゴンオルフェノク・魔神態」、鰐塚が鰐の特徴を持つ「クロコダイルオルフェノク」へ変化すると、ワイバーン・シグマが灰から出現させたオルフェノク軍団に向かっていく。

それを見ながら帝はディカイザドライバー、鳳姫はツヴァイフォンを装着しキングライドブツカーからディカイザーのライダーカードを構え挿入、ツヴァイフォンにコード281を入力し同時に叫ぶ。

『カメンライド!』

【スタンディングバイ】

「「変身!」」

『ディカイザー!』

【コンプリート】

そして二人はディカイザドライバーのバックルを閉じ、ツヴァイドライバーに挿入。12の虚像とフォトンブラッドのラインに包まれ、ライドプレートが顔に刺さり、光が晴れるのと同時にその姿をディカイザーとツヴァイに変えそれぞれの武器を構え、ワイバーン・シ

グマに突っ込んでいった……

「ハア！」

雪月花を振りかざし、オルフェノク達を斬り裂いていく冬花。何体かオルフェノクを斬ると、彼女の瞳が輝き背中から翼が出現する。

(フユカドウシタノダ……！コ、コノカンカクハ……！)

『帝さんの……ために……強くなりたい……』

髪が変化すると、あの槍が出現し冬花の体を翼が包み込む。そして翼が勢いよく開かれると、仮面ライダーオーズのコンボの一つ「タジヤドルコンボ」の腕と足、肩と胴体部分が青くなり、本当の鳥のような形の結晶を身に纏った姿となると瞳の輝きが収まり、ハツとなる。

「あれ？私は……って！何で浮いてるの私!？」

(イマハキニシテルバアイデハナイ……ヤツラヲブツタキルノダ……)

「それもそうだね……それじゃあ行くよ！」

『結構やりますね……ハッ!』

『負けてられねえな……オラッ!』

『そうだね……ハア!』

冬花は高速で飛翔しながら、槍と雪月花を手足の様に振り回し、どんとオルフェノク達を斬り裂く。それに合わせるようにラッキークローバーの三人も鞭を振り回し、爪で斬り裂き、バックラーで吹き飛ばしていく。そして数分後には、敵のオルフェノクの気絶した人間態だけが倒れていた。命を大切に思う鳳姫の意志を守る彼らは命を奪わなかったのである。

一方のツヴァイとディカイザーは、ワイバーン・シグマの振り回す尻尾の攻撃を回避しながらキングライドブッカーとクイーンドライバー、ツヴァイムーバーの銃身が少し伸び、銃口が二つある「ムーバーショット」から大量の光弾と拡散光弾を発射する。

「無駄なあがきを！」

しかしその攻撃を全て受けても無傷なワイバーン・シグマは口の部分から緑色の破壊光線「デストロイ・シグマスマッシュャー」を放ち、二人を吹き飛ばす。それでも二人は果敢に接近し、今度はソードモードのキングライドブッカーとクイーンドライバー、ムーバーエッジで斬撃を放つ。それを両腕の「シグマ・ブルムスラッガー」で全て防ぎ、跳ね返す。

「チツ……奴に弱点とか無いのか！」

「あるとすれば……あのシグマフォンです！」

二人は腰の部分に融合しているが、液晶部分とその一部が見えているシグマフォンを見る。それが分かるとディカイザーは一枚のカードを発動する。

『アタックライド！サーチ！』

デイクイザーの視覚がシグマフォンを捉えると、緑色のフィールドらしき物で包まれているのを確認。更に三枚のカードを取り出す。それはツヴァイの顔、巨大なレーザー砲を持つツヴァイ、ツヴァイのマークの描かれたカードでその二枚目のカードをドライバーに装填し発動した。

『ファイナルウェポンライド！ツ、ツ、ツ、ツヴァイ！』

「くすぐりも痛みも無いぞ！」

「えっ？」

デイクイザーがツヴァイの背中を開く様になると、ツヴァイの右手に銀と虹色のラインに彩られた巨大なレーザー砲「ツヴァイカノン」が出現し、それに合わせてツヴァイのフォトンブラッドとが虹色に変わる。それを気にせずワイバーン・シグマが突っ込んでくるが、ツヴァイが引き金を引くと虹色の光線が連続で放たれ、ワイバーン・シグマの装甲を削り吹き飛ばす。

『グオツ！な、何だこの力は！ま、まさかこれがお前の長の力か！』

「それだけじゃねえ……俺や皆とこいつの絆の力だ！」

『貴様は一体何だ！』

「平和という名の支配を与える通りすがりの元帝王だ……しっかり頭に叩き込んでおけ！」

『信じる物かあああああっ！』

緑色の炎を纏って尻尾を突きだしたワイバーン・シグマに対し、デ
イカイザーはツヴァイのマークが描かれたカードをデイカイザーは
発動した。

『ファイナルアタックライド！ツ、ツ、ツ、ツヴァイ！』

デイカイザーがツヴァイに触れると、金色のエネルギーが流れ込み
ツヴァイカノンにたまっていく。ツヴァイもそれに合わせてツヴァ
イフォンの液晶画面にタッチする。

【エクシードチャージ】

その電子音声と共に、ツヴァイカノンの銃口が伸びて展開される。
そして青のフォトンブラッドの光もチャージされその瞬間、ツヴァ
イが引き金を引くとさつきとは比べものにならない太さと輝きの光
線を放つ必殺技「デイカイザーストライク」が発射される。そして
ワイバーン・シグマとぶつかり合うが、段々とワイバーン・シグマ
が押されていき、炎がかき消されるのと同時にワイバーン・シグマ
とシグマフォンを貫いた。

『グオツ！？バカ……な……俺は命を……この命を限
りない物に……！』

その言葉と共に、ワイバーン・シグマは青い炎に包まれ灰となった。
そしてそこには青いTとYが合わさったマークに斜めの線が浮かび
上がった。

「あなたの事も「いや、大丈夫だ。」……え？」

変身を解いた鳳姫の言葉を遮りながら同じく変身を解いた帝が指差した方向には健吾が倒れていた。

「ど、どうしてですか？」

「こいつのおかげだ。」

そう言つて帝が見せたのは藍色の戦士のカード。それは帝が出会つた別世界を渡り歩く破壊の代行者とその義妹、その仲間たちとの絆の証であつた。

「これは破壊の代行者、仮面ライダーディージェンドのカードだ。さっきお前が光線を放つのと同時にこれに変身し、アンチ・キルっていう殺す事のない効果を付与させたのさ。」

「さ、流石ですね……」

帝の説明からヴィジョンを作り出した鳳姫はただ驚くのであつた……そして健吾は部下のオルフェノクを縄で縛り終えた冬花やラッキークローバー達によって学園の中へと運ばれていった。

（翌日）

ツヴァイの世界でやるべき事を終えた帝達は学園の門で鳳姫と最後の会話をしていた。

「そうか……健吾はまだ考えを変えないのか……」

「それでも、いずれは限りある命の大切さ、人間とオルフェノクの

共存の素晴らしさを教えたいと思います。」

「頑張ってください！」

そして三人はそれぞれ握手し、鳳姫は学園の中へ、帝と冬花は家へと戻って行くのであった。その後、家にたどり着いた帝と冬花が見たツヴァイが描かれていたあの絵画は後ろを向いているシグマ、前を向いているツヴァイとラッキークローバーが変身したオルフェノク達の描かれた絵画となっていた。

「今は向き合ってなくてもいずれ向き合える。ってことだろうな・・・」

「そうですね〜あつ、絵が変わりましたよ！」

だが、次に変わった絵は他の二つの絵と何かが違うのだ。全てが破壊された街に一人だけ立っている全身が漆黒のライダーと、その地面に落ちている壊れかけの刀の様な物やベルトの様な物という絵画であった・・・

「?????」

そしてどこかの家らしき場所でもこれを見ている人物達がいた。

「な、何なんだ・・・この恐ろしい絵は・・・」

「先生、私恐いよ・・・」

「次の世界は用心深く行かないとな・・・」

「そうですね・・・」

暗くて良く見えないが、二人の青年と二人の少女がその絵画にとってもない恐怖感を抱いているのであった……。そして本来会うことのない二つの物語が今、交わろうとしていた。

限りある命を大切に（後書き）

（コラボ編予告）

帝と冬花がやってきたのは闇の渦巻く世界だった……

「この世界には闇がある……」

そこで出会う謎の旅人一行……

「俺は闇影、闇を光に導くおせっかいな家庭教師さ。」

そして明らかになるお互いの正体……

「お前が……デイルイト……世界を焼き尽くす何とかって奴か！」

「違う！それはまやかしだ！」

争い続けるお互いの前に現れる最強の敵。

「お前らの闇は全て喰らわせてもらった……」

そして二人が手を取り合うとき、新たな力が生まれる！

「俺は支配する……闇を受け入れたとしても！」

「そして導き続ける……光へと！」

仮面ライダーディカイザー（世界の支配者）と仮面ライダーディラ

イトく世界の光導者くのコラボ、お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7477u/>

仮面ライダーディカイザー～世界の支配者～

2011年10月11日12時05分発行